

2019年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラム（A）
蓬萊日本語教室受託 「生活者としての外国人」のエンパワーメント事業

外国人のチカラを引き出す 日本語ボランティア研修

国際理解×日本語

日本語ボランティア用研修教材



蓬萊日本語教室

はじめに

蓬萊日本語教室では、2019年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラムの委託を受け、5回の講義による研修、5回の実習、発表会から成る日本語ボランティア研修会を実施しました。その研修の内容を、講義をされた先生方にまとめていただき、これを読んでくださる皆さんが自分たちで実習ができるように日本語教室活動の手順を記し、「生活者としての外国人」のための日本語教育の実践を目指す日本語ボランティアの皆さんの研修教材として使っていただけるように編集いたしました。

地域日本語教室で日本語を学ぶ学習者の皆さんの中には、来日から数年が経ち日本での生活にも慣れ、仕事に就いたり子育てをしたり、日本での生活を安定的に送っている人もたくさんいます。そのような彼ら彼女らを一人の人間として見たとき、日本での生活の中で十分な自己実現がなされているのか、母国で得た知識や経験が日本での生活の中で活かされているのか、自ら発信し、地域社会の役に立っているという満足感や承認は得られているのかなど、日ごろ地域日本語教室でいっしょに日本語を学習する中で感じるところがありました。

日本語教室の中では、私たち日本語ボランティアが思いもよらない発想や見方を披露してくれて、私たち日本人の発想の転換や視野を広げることに大いに活躍してくれているのですが、日本語教室以外ではどうかと聞くと、そんなこと聞かれもしないし言わないと答えてくれた学習者さんがいました。外国出身の皆さんの知識や発想は、日本人社会に刺激を与え、発想を豊かにし、活力ある地域社会の実現に大きく貢献できる宝だと私は思っています。日本人社会から見たら宝であり、外国出身の皆さんにとっては経験や知識という財産を、活かすための日本語教育活動ができないかという思いで、この研修会を実施しました。

「日本人に聞かれもしないし言わない」と言っていた彼女の言葉に象徴されるように、外国出身の皆さんが持つ財産を地域社会で活かすためには、外国出身者の皆さんの発信力を高めるというエンパワーメントも大事ですが、それを受け入れる日本人社会が変わることがもっと大事です。そのために、まず私たち日本人が「日本人は日本語や習慣、文化を教える人、外国人はそれを習う人」という固定的な概念を取り払う必要があります。日本人と外国出身者がお互い対等で尊敬し合う関係を築いていかなければなりません。このトレーニングには、文化相対主義、多文化共生の考え方を取り入れた国際理解教育の手法も大いに役立ちます。

この教材は、「生活者としての外国人」のための日本語教育を軸に、その実現のために国際理解教育、日本語教育の理論、やさしい日本語、実践例などを紹介しています。外国出身の皆さんがもっと生き生きと地域社会で活躍できる人財となってもらえるような日本語教育活動の参考にさせていただけたら幸いです。

2020年3月

蓬萊日本語教室 代表 日下部喜美子

目次

第1回	「生活者としての外国人」のための日本語教育 米勢治子（東海日本語ネットワーク）	1
第2回	実習「日本語教室に参加する」 日下部喜美子（蓬莱日本語教室）	13
第3回	地域型日本語教育を考える 中川祐治（福島大学）	19
第4回	世界に一つの国際理解講座 幕田順子（公益財団法人福島県国際交流協会）	27
第5回	やさしい日本語 齋藤美幸（インターカルト日本語学校）	31
第6回	外国出身者の持つ知識や経験を活かすプログラム 実践：すべては対話から始まる 芳賀洋子（地球っ子クラブ2000、多文化子育ての会 Cocorico、てんきりん）	41
実習①	外国出身者が自分だけのエピソードを見つける 日下部喜美子（蓬莱日本語教室）	57
実習②	日本人にインタビューをする 永島恭子（一般社団法人ふくしま多言語フォーラム）	61
実習③	「発表会」の実施 日下部喜美子（蓬莱日本語教室）	67

第1回

「生活者としての外国人」のための日本語教育

はじめに

1. 支援対象とする学習者の変化
2. 多文化共生施策と日本語教育
3. 「生活者としての外国人」への日本語教育
4. 地域日本語教室のあり方
5. 日本語ボランティアとは
6. 日本語ボランティアの基礎力

☆ふりかえり

よねせ はるこ
米勢 治子

（東海日本語ネットワーク）

はじめに

この養成講座は文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教育事業の一環である地域日本語教育実践プログラム（A）として実施されたものですが、ここからわかることは、講座の受講者が支援対象とするのは「生活者としての外国人」ということになり、そして、「地域日本語教育」を実践するわけですから、地域の実情に合った、または、地域に密着した活動内容が期待されます。また、講座の全体タイトルは「外国人のチカラを引き出す日本語ボランティア研修」となっていますので、受講者には「外国人のチカラを引き出す」活動をするのが期待されています。

第1回では、上記のことを少し丁寧に見ていき、支援者であるボランティアの役割について考えたいと思います。

1. 支援対象とする学習者の変化

一口に日本に暮らす外国人と言っても多様です。

👉 みなさんの周りにいる外国人の背景について考えてみてください。いつごろ・なんのために来日したのでしょうか。日本で何をしていますか？ 日本語はどれくらいできますか？ 何のために日本語を勉強していますか？

これまで来日した人々について、年代をさかのぼって見ていくと、1970年代までは、外国人と言え、留学生やビジネスパーソンなど、高度人材と呼ばれる人が中心でした。

80年代に入ると、中国帰国者やインドシナ難民といった定住を目的とした人々が来日するようになりました。中国帰国者とは戦後中国にとどまった「中国残留孤児婦人」と呼ばれた日本国籍を持つ人々とその家族として来日した人々を指します。また、インドシナ難民とはベトナム戦争終結やその後のラオス、カンボジアの内戦に伴って世界中に散らばった難民を指します。そして、人口の男女バランスから生じた日本人男性の配偶者需要に応えたアジアからの女性の来日が増えたのもこの時期です。これらの人々は、その成育歴に差があり、中には非識字者も含まれていましたので、これまでの高度人材を対象とした日本語教育から変わらざるを得ませんでした。まさに「生活者」の視点からの日本語教育が必要とされたのです。

90年代にはいると、1990年の出入国管理及び難民認定法の改定に伴って、ブラジルをはじめ

とする中南米日系人の来日が急増します。日系2世、3世であれば、日本での活動制限のない在留資格で滞在することができる人々が工場労働者として働くようになりました。ここ数年はフィリピン日系人の来日が目立つようになってきました。日系労働者の多くは家族で来日し、日本語を必要としない労働現場、地域コミュニティに身を置き、子どもたちへの教育も含めて、「出稼ぎ」のつもりが、実際には定住化している人々です。2001年以降、外国人集住都市会議において国に対する対応策が要望されてきました。

一方、労働力不足への対応は、研修生、技能実習生と名を替えながら、増え続けています。2010年の入管法改定では、技能実習という在留資格が創設され、2019年の入管法改定では、特定技能の在留資格ができました。技能実習生には一定の日本語教育が課せられ、特定技能は一定の日本語能力が要件になっています。また、留学生の資格外活動（週28時間以内）を超えた労働状況も問題になっています。

2. 多文化共生施策と日本語教育

増え続ける外国人に対して、国はどのような受け入れ施策をとってきたのでしょうか。

総務省は平成18（2006）年3月の「多文化共生の推進に関する研究会報告書」において、各自治体に多文化共生推進プランを策定するよう要請しています。報告書では「多文化共生」の定義を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」としています。そして、その中に外国人住民に対するコミュニケーション支援を挙げています。日本語教育は多言語対応と共にコミュニケーション支援の一翼を担うものですが、プランに沿えば、「地域における日本語教育の目的」は「多文化共生」の基盤づくりということになり、対象は「住民全体」ということになります。

同じく平成18（2006）年12月25日には、外国人労働問題関係省庁連絡協議会が、「生活者としての外国人」に関する総合的対応策を発表しています。「生活者としての外国人」という視点を国が示したわけです。

文化庁では、平成19（2007）年、文化審議会国語分科会に日本語教育小委員会を設置し、日本語教育に本格的に取り組むこととなります。翌年の平成20（2008）年1月21日に「国語分科会日本語教育小委員会における審議について—今後検討すべき日本語教育の課題—」を発表、続く平成21（2009）年1月27日には「国語分科会日本語教育小委員会における審議について [日本語教育の充実に向けた体制整備と「生活者としての外国人」に対する日本語教育の内容等の検討]」を発表しました。これらを受けて、平成22（2010）年から25（2013）年にかけて「生活者としての外国人」に対する日本語教育の内容・方法の充実（カリキュラム案、ガイドブック、教材例集、日本語能力評価、指導力評価、ハンドブック）をまとめ、翌26（2014）年には、NEWS（日本語教育コンテンツ共有システム）として誰でも検索可能なシステムを提供しています。さらに、平成30（2018）年、31（2019）年には、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」「同 改訂版」をまとめています。文化庁は10年をかけて日本語教育の指針を作ってきたと言っているでしょう。けれども、現場のボランティアにとっては「標準的なカリキュラム案って何？」とか「聞いたことない！」という人たちがほとんどかもしれません。せつかくの宝が浸透しないのは残念です。

平成30(2018)年12月25日に閣議決定された、外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議による「外国人材受入れ・共生のための総合的対応策」はマスコミにもこれまでに大きく取り上げられました。この流れは「労働者としての外国人」に関心が向けられがちですが、「生活者としての外国人」の視点を忘れてはならないでしょう。

令和元年(2019年)6月28日の「日本語教育推進に関する法律の公布、施行」は記憶に新しいと思います。この法律が基礎自治体における地域日本語教育にどのように反映されるかは、現在のボランティアによる地域日本語学習支援活動に大きくかかわってくると言えるでしょう。

3. 「生活者としての外国人」への日本語教育

「生活者として」必要なことは何でしょうか？ まず、生活費を得るための就労が挙げられます。そのほかにも、家事や子育て、介護なども必要でしょう。日本語を学ぶことの優先順位は低いのです。さらに、生活者の学習環境を考えると、非集中的、非継続的学習環境と言えます。つまり、日本語学習の時間を集中してとることもできないし、継続的に休まず学ぶことも難しいということです。とはいえ、日本語は必要ははずです。

 「生活者として」必要な日本語にはどんなものがあるのでしょうか？

ここでは、大きく、生活のための日本語、ライフステージに応じた日本語、社会参加のための日本語の3つにわけて考えたいと思います。「生活のための日本語」とは誰もが遭遇する、買い物や役所などでの手続き、交通手段、住居の確保、医療や災害、近所づきあいといった様々な場面で必要とされる日本語です。「標準的なカリキュラム案」で主に扱っている事柄はこれに当たります。

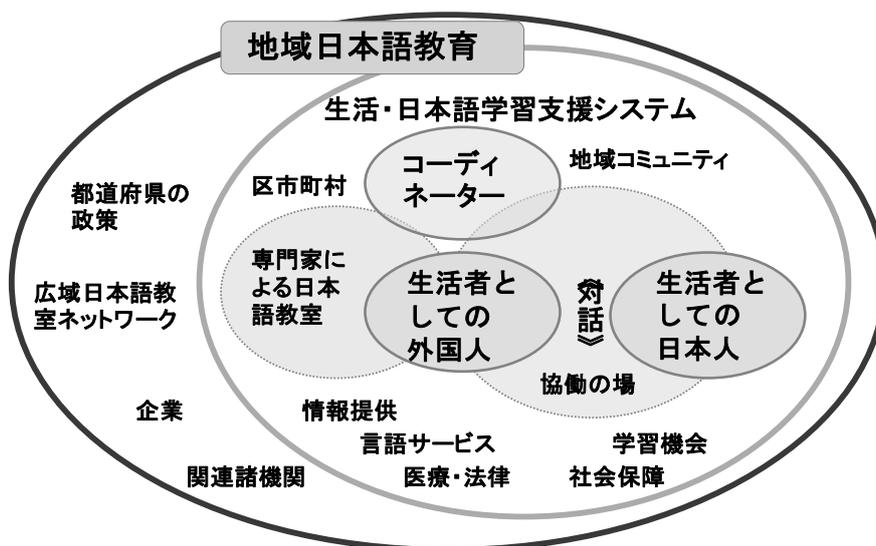
「ライフステージに応じた日本語」とは、就職、結婚、出産、子育て、介護、死、キャリア形成など、その時々を考えなければならない日本語を指します。それぞれに必要な費用を考えた資産形成や保険について学ぶことも必要になります。

そして「社会参加のための日本語」とは、自身の経験や知見を日本人と対等に発揮できることを指します。所属する社会に貢献するための日本語です。この社会参加のためには、日本人の側が受容する能力(多文化共生力)がなければ難しいとすることができます。人間関係を構築するための日本語も必要な視点となります。

4. 地域日本語教室のあり方

私たちが活動している地域日本語教室は、「生活者としての外国人」のための日本語教育の受け皿としてあるわけですが、どんな日本語教室が必要とされるのでしょうか？

下の図は、2007年に文化庁の調査研究委託を受けた日本語教育学会が報告書で示したものです。対話と協働の場が日本語教室の現場を示しています。



地域日本語教育のシステム図(日本語教育学会 2008,2009)

👉 上の図からわかることは何でしょう？ 図にある言葉を入れてみましょう。

- ① 教室の活動目的： _____
- ② 教室の参加者： _____ ・ _____ ・ _____
- ③ 教室で行う活動： _____ ・ _____
- ④ 「生活者としての日本人」の役割：外国人と _____ ・ _____ する
- ⑤ 「コーディネーター」の役割： _____ ・ _____ の場を創る

👉 「日本語ボランティア」は、どの人なのでしょう？
あなたは日本語教室でどの役割を担っていますか？



図の「コーディネーター」とは、生活・日本語学習支援のために、仕事として、対話・協働の場を創る役割を担う人を指しています。ですから、ボランティアは「生活者としての日本人」として、外国人と対話・協働する役割を担うこととなります。ですが、実際には地域の日本語教室に有償のコーディネーターが配置されているのはごくわずかにすぎません。ほとんどの教室では、ボランティアがコーディネーターの役割も担っているはずです。

5. 日本語ボランティアとは

👉 以下の文を読んで、強く共感したところにアンダーラインを引きましょう。

日本語ボランティア —地球市民時代のご近所づきあい—

（鳥取大学国際交流センター 御館久里恵）



『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖』（凡人社）を紹介します。

「『日本語ボランティア』って何するの？」と聞かれたら、それは「地球市民時代のご近所づきあい」だと言えると思います。

近所に新しい人が越してきたら、同じ町で楽しく暮らしていきけるよう、いい関係を作りたいと思うでしょう。自分たちの町のことでわからないことがあれば助けてあげたいし、相手のことも知りたい。互いに子どもがいたり、共通の趣味があったりしたら、一緒に話したり様々な活動に参加したりして、少しずつ仲良くなっていくのではないのでしょうか。地球規模でいろいろなところから移り住み、新しく隣人となった人とのおつきあい、それが日本語ボランティアです。

生活者として地域で暮らす外国人が、まず何に困るだろうかと考えれば、「日本語」が真っ先に思い浮かぶだろうと思います。それで「“日本語”ボランティア」という名で呼ばれ、その活動が重視されるのですが、実際には、「日本語」（の単語や文法、発音など）を、「知識」として学んでも、その人の地域での暮らしやすさにつながらないことがよくあります。なぜなら、その人の生活上の課題や希望・要望は、「日本語」そのものにあるのではないからです。

私が今までに地域の日本語教室で出会った人の中に、とても印象深い人たちがいます。一日も早く子どもの担任の先生と話せるよう毎週熱心に通う人、職場でいじめにあい、「Please respect me.」を日本語で何と言うのかだけを知りたくて来た人、学校からのお知らせの漢字が読めず、自分の子どもだけが遠足の日にランドセルで行ってしまったと笑い話にする人、一人の大人として、手続きなどを自分でできるようになるために日本語を学ぼうとする人…。かれら（彼女／彼ら）には、伝えたい、知りたい、自立したい、という強い思いがあるのです。そしてさらに、かれらの抱える課題や問題の所在は、かれら自身にではなく、ホスト社会である日本社会の側にあるということも言えると思います。

そこで、『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖』では、「対話中心の活動」を勧めています。「対話中心の活動」では、外国人参加者と日本人ボランティアが、日本語を使ってコミュニケーションをし、人間関係を築き、相互理解を深めていきます。そこで交わされるのは、架空のことばではなく、その人の生活や人生にとって意味のあることばです。外国人参加者は、このプロセスを通して、日本語を身につけるとともに、地域で生きていく力をつけていくのです。また、日本人参加者も、外国人とのコミュニケーションの方法を学んだり、外国人参加者が抱える課題から、地域を見直したりすることができます。日本語教室は、人間関係づくり、地域づくりの場なのです。（続きは次頁後半に）

👉 話し合いましょう！

- ・強く共感したところはどこですか？ 疑問に思ったところは？
- ・日本語教室の役割は？
- ・日本語ボランティアの役割は？



この文は、『にほんごボランティア手帖』を執筆した仲間の一人、御舘さんが自書を語ったものですが、学習者の伝えたい・知りたい・自立したいという強い気持ちに着目した対話中心の活動を勧めています。それは、先に示した「地域日本語教育のシステム図」と共通していることに気付くことができます。そして、日本語ボランティアに必要な基礎力として以下のように述べています。

6. 日本語ボランティアの基礎力

では、そのような「対話中心の活動」をする日本語ボランティアには、何が求められるのでしょうか。本書では、日本語ボランティアに大切な「基礎力」として、以下の3つを挙げ、そのポイントを紹介しています。

1. 活動創造力：ネタを見つけて、生き生きとした活動を生み出すこと
2. コミュニケーション力：お互いに気持ちよくコミュニケーションすること
3. 場づくり力：誰にとっても居心地のいい場をつくること

また、実際に活動をする中でぶつかるであろう疑問や悩みを Q&A 方式でとりあげたページや、先輩ボランティアの実際の活動の様子をインタビュー形式で紹介したページもあり、より具体的なイメージをつかんでもらえると思います。

上に挙げた「基礎力」を身につけたボランティアが増え、さらにそれを身近な人にも伝えていくことで、外国人にも暮らしやすい地域にしたいと考える人が増えていくことでしょうか。そうすれば、少しずつ社会も変わっていくのではないのでしょうか。地域の日本語教室は、その一歩を踏み出す入り口なのだと思います。

興味を持ってくださった方のために、日本語ボランティアの「つぶやき」を記した「ボランティア川柳」（各ページ下に掲載）から、いくつかご紹介します。

- ー大人でも 友達100人 できるかも
- ー私より いつもウケるよ アリさんのダジャレ
- ーボランティア 始めて、増えた 夫婦の会話
- ー何でだか 元気になるよ 活動後
- ーおしゃべりが いつのまにやら 課題解決

みなさんも、「地球市民時代のご近所づきあい」、始めてみませんか。

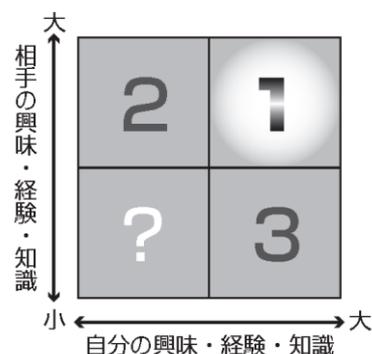
（くろしお新時代教育のツボ WEBSITE）より

（1）活動創造力…ネタを見つけて、生き生きとした活動を生み出すこと

活動想像力はコーディネーターが活動テーマを決めるために必要とする力です。

👉 「学習者のチカラを引き出す」には、どんなことについて話せばいいでしょう？

右の図は、『にほんごボランティア手帖』からの抜粋ですが、「1」の対話する双方にとって興味・経験・知識があるテーマだと話しやすく、盛り上がることでしょう。「2」も学習者のチカラを引き出すテーマですから、ボランティアには学習者の話をじっくり聞こうとする態度が求められます。「3」は学習者に知りたいという気持ちがあれば、ボランティアの経験や知識が生きるでしょう。



（2）コミュニケーション力…お互いに気持ちよくコミュニケーションできること

対話活動をするのは「生活者としての外国人」である学習者と「生活者としての日本人」であるボランティアです。ボランティアのコミュニケーション力が対話活動の成否を決めると言っても過言ではありません。以下の表を埋めることによって、自分自身のコミュニケーション力をふりかえてみましょう。

👉 どうすれば、お互いに気持ちよくコミュニケーションできるでしょう？

	接し方 (共通すること←)	聴き方	話し方
コミュニケーションを促進するもの			
コミュニケーションを阻害するもの			

「接し方」としては、笑顔、相手を見て、適度な距離感などが挙げたのではないのでしょうか。真面目な顔が「怖い顔」と捉えられたりしては困りますね。適度な距離感で相手をきちんと見る必要があります。

「聴き方」としては、全身で「聞いているよ」という態度を示したいと思います。相槌を打ったり、確認したりすることが大切です。相手の言ったことを繰り返す＝確認することで、相手の発音や文法の間違いをそれとなく直すこともできます。気をつけたいのは、なかなか言葉が出てこないときに、「こういうこと？」と先取りしては、せっかくの発話チャンスをつぶしてしまうかもしれません。相手の話を途中で遮ったり、知りたいことがいっぱいあまり質問攻めにするのも気をつけたいと思います。

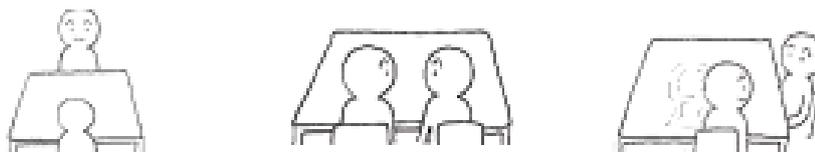
「話し方」は、とにかく、相手が理解できる日本語（＝やさしい日本語）で話すことです。コツは、短く（1文に1情報）、はっきり、最後まで（文末をあいまいにしない）です。絵やジェスチャーをふんだんに使えば、分かりやすくなります。ときどき、学習者から聞くのは、「やさしい日本語」を使うことで、大きな声で何度も繰り返し、無意識に子ども扱いしている態度に傷つくというものです。なかなか難しいけれど、気をつけたいと思います。

（3）場づくり力…誰にとっても居心地のいい場をつくること

居心地のいい場とはどのようなものなのでしょうか。物理的な環境としては、明るくきれいな室内と机や椅子、快適な空調など、理想を言えばきりがありませんが、工夫次第でできることもあります。教室に集う学習者の数とボランティアの数から、どんな教室形態が活動しやすいか、机と椅子の配置やどの人とどの人を同じグループ、または、ペアになってもらうと活動しやすいか、こんなことを考えるのもコーディネーターの役割です。

下の図を見てください。3ペアの位置関係はどれが一番話しやすいと思いますか？

心理学でよく言われるのは斜め45度だそうです。



また、下の図の4人の関係図からは何がわかるのでしょうか。左側の4人は誰が教える人で誰が学ぶ人かがすぐわかります。教える人が3人に向かって一方的に話しています。右側の4人は誰が教えるというわけでもなく4人が双方向に対話をしています。矢印の向きの合計を比べると、左が3に対して、右は12、なんと4倍に当たります。そして、学習者同士、ボランティア同士もグループ内で助け合いながら活動できると安心して参加できるのではないのでしょうか。



イラスト（このページ）：『にほんごボランティア手帖』より

実際に活動が始まってからも、とまどうことが出てくるかもしれません。Aさんは学習者と少し話すとネタが尽きてしまう、もう話すことがないと言います。Bさんは単語の意味や文法について説明しようとする、その説明のことばがさらに難しくなるようで、どうしていいかわからないと言います。そして、Cさんは自分だけが気持ちよく話し続けていることに全然気づいていません。皆さんの教室では、Aさん、Bさん、Cさんのようなことは見られませんか？

👉 以下のようなとき、どうすればいいでしょうか？

A：話が續かない…

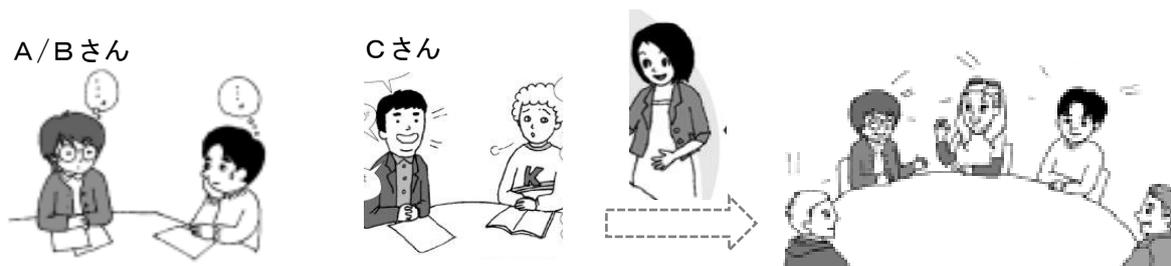
B：説明のことばが通じない…

C：自分だけ話しているボランティア

こうしたときに、上手に介入するのもコーディネーターの役割です。Aさんのようにペアで話しに行き詰っている場合は、2つのペアを4人グループにしたり、次々ペアを替えたりすることもできます。また、ちょっとした話題の転換を示したり、AさんにAさん自身のことを質問したりすることで話題を広げたりできるでしょう。Aさんが話すことを義務のように感じることなく、相手に興味を持ってくれるのが一番です。

日本語教師は「説明はしない、例示する」を鉄則としていますが、分かりやすい例示を示すのは簡単ではありません。Bさんには、困ったら、コーディネーターを呼べばいいし、翻訳アプリの助けを借りるのもいいと伝えたいと思います。

自覚のないCさんが一番の「困ったさん」かもしれません。ボランティアも自分の話を聞いてくれる人を求めて教室に来ているのだなあと感じることはけっこうあります。Aさんの場合と同じように、それとなく対話相手をシャッフルするといいでしょう。また、Aさんと同様、個人としての学習者に興味を持ってもらえるといいなあと思います。



イラスト：『にほんごボランティア手帖』より

☆ ふりかえり

いかがでしたでしょうか。ここまで学んでみて、あなた自身は変化したでしょうか。
以下の項目について、どれくらい学びが深まったか、自己チェックしてみてください。

	チェックしましょう！	◎	○	△	×
1	国の日本語教育施策の流れと方向性について知ることができた				
2	外国人の生活・学習環境と日本語教室のあり方が理解できた				
3	日本語ボランティアの役割と基礎力について理解できた				
4	学習者のチカラを引き出す活動をやってみたい				

このチェック項目では、4の「活動に対する気持ち」が一番重要です。1，2，3については、学びたいときにいつでも学ぶことができます。

どうぞ、思い切って「学習者のチカラを引き出す」対話型の活動を試してください！

《引用文献》

『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖』 凡人社（2010）

『外国人と対話しよう！にほんごボランティア手帖 すぐに使える活動ネタ集』 凡人社（2011）

『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）—報告書—』 日本語教育学会（2008，2009）

http://www.nkg.or.jp/old/book/080424seikatsusha_hokoku.pdf

くろしお新時代教育のツボ WEBSITE 日本語ボランティア—地球市民時代のご近所づきあい—（2011. 9.28）

「生活者としての外国人」のための日本語教育の内容・方法の充実 『カリキュラム案』『ガイドブック』『教材例集』『日本語能力評価』『指導力評価』『ハンドブック』文化庁（2010～2013）

http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/nihongo_curriculum/index.html

2019年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラム（A）

主催：蓬萊日本語教室

外国人のチカラを引き出す日本語ボランティア研修 第1回

第2回

実習「日本語教室に参加する」

1. はじめに
2. 教室を見学し、ボランティアとして参加しよう
3. 自分たちで「対話を中心とした日本語学習会」を実践してみよう
4. 振り返り
5. おわりに

くさかへ きみこ
日下部 喜美子

（蓬萊日本語教室）

1. はじめに

第1回の講義で「生活者としての外国人」のための日本語教育とは、どのような活動であるかを学びました。グローバル化が進み、人の移動が活発になり、国境も容易に超えてしまう現在、地域社会の隣人として、日本人も外国出身の皆さんも対等の立場で、歩み寄り、補い合って、さまざまな価値観が尊重される多文化共生の社会を創っていく必要があります。

「生活者としての外国人」のための日本語教育実践の場である地域日本語教室は、地域社会で安全で快適に暮らしていくために必要な力だけではなく生活に必要な知識や情報を得る場でもあります。日本語学習者と日本語ボランティアの関係は、先生と生徒の関係ではなく、お互い対等の立場に立って対話することが大事です。その対話を引き出すために、さまざまな仕掛けや活動が用意されています。対話を通した日本語教室活動を実際に体験してみましょう。

2. 教室を見学し、ボランティアとして参加しよう

👉 近くに、地域日本語教室があれば、見学かボランティアとして参加させてもらいましょう。

3. 自分たちで「対話を中心とした日本語学習会」を実践してみよう

近くに地域日本語教室がなければ、自分たちで実践してみましょう。

👉 「自分で調べて計画を立てよう」というテーマで日本語の学習を、日本語を学ぶ人といっしょにやってみましょう。

(1) テーマ

「自分で調べて計画を立てよう」

(2) 日本語学習のめあて

日本語を学ぶ人（以下、「学習者」と表記します）が、地元の人に聞いてお勧めの観光地や店の情報を得ることができ、行きたいところに行く方法を自分で具体的に調べることができるようになることがこの学習の目標です。

(3) 参加者

日本語ボランティアも学習者もそれぞれ複数いたほうが、対話の幅が広がって学習効果が上がります。日本語ボランティアと学習者はほぼ同数だと学習が進めやすいです。

日本語ボランティア2、3人、学習者2、3人で、4～6人のグループを作って学習します。学習者の日本語の力はあまり気にしなくていいです。初級の人でも上級の人もいっしょに学習できます。

グループで学習を進める日本語ボランティアの他に、日本語学習の進行を務めるファシリテーター（進行役）が必要です。ファシリテーターは、活動の内容を具体的に指示し、日本語の学習を進行します。

日本語学習の活動を進めるにあたり、日本語ボランティアは教える人、学習者は習う人という気持ちは捨てましょう。いっしょにおしゃべりをして、情報交換をするという感覚で活動に参加しましょう。日本語ボランティアは自分が話す量にも気を付けてください。学習者に日本のことを教えてあげなくちゃという気持ちで、日本語ボランティアだけが一方的に話してしまうことにならないように気をつけましょう。

(4) 準備物

筆記用具、観光パンフレット（日本語でも学習者の母語でもどちらでもいいです）

ワークシートも必要に応じて使ってください。

スマートフォンやタブレットで検索できるような環境があるといいですね。

(5) 日本語学習を始めましょう

① 自己紹介

まずグループのメンバーで自己紹介をしましょう。

よく知っている人どうしても、まだ知らないことがあるかもしれません。

自己紹介の内容の例

名前、呼んで欲しい名前（「～と呼んでください」）、出身地、

わたしの好きな○○、昨日の夜食べた物、

実は私○○なんです（この場にいる人が知らない情報をカミングアウト）

上記の例全てをやる必要はありません。自己紹介はプライバシーに関わるので、無理強いすることなく、みんなが楽しめるトピックを選んでください。もちろん、日本語ボランティアも自己紹介をします。むしろ、日本語ボランティアから始め、お手本を示しましょう。

自己紹介を聞くだけでなく、質問も歓迎してください。他の人の自己紹介を真剣に聞かないと質問はできません。ときどき、他の人の自己紹介を聞き流している人がいます。そのような人には、ファシリテーターが自己紹介で誰かが言った内容に関する質問をします。聞いていなかったり、日本語が理解できなったりしたら、「もう一度言ってください」、「やさしい日本語で言ってください」と、自分で直接、もう一度自己紹介をした人に聞くよう促しましょう。

自己紹介はインフォメーションギャップの宝庫です。知らないことを知りたい、相手が知らないことを伝えたいと思うことで対話が生まれます。自己紹介が盛り上がり、あっという間に1時間が経過してしまったということもあります。その1時間は対話による真正の学びの時間として、充実した日本語学習ができたということです。もちろん、1時間の間、日本語ボランティアがずっと話していたでは話が違いますよ。日本語ボランティアは話す量に気を付けて、学習者の発話を引き出すことを優先しましょう。

② 学習者の興味を引き出しましょう

観光パンフレットを見たり、日本語ボランティアがお勧めを紹介したりして、学習者が行ってみたいと興味を持つ場所やイベント、お店を見つけましょう。

学習者が訊ねる前に、日本語ボランティアからお勧めの場所をあれこれ伝えることは避けましょう。学習者から「お勧めの〇〇はありませんか？」と訊ねてもらってから答えるようにしましょう。

その時、パンフレットやスマホやタブレットの写真はイメージを活性化するので大いに活用しましょう。

③ 学習者が行ってみたい場所に行く方法をいっしょに調べましょう

行ってみたい場所、体験してみたい場所が決まったら、具体的に自分一人の力でどうやってそれを実現するか、日本語ボランティアは学習者が調べる手助けをしましょう。

スマホやタブレットで学習者が自分で調べられるように、有効な検索のキーワードを教えてください。学習者が母語で必要な情報が得られるのであれば、無理に日本語で検索する必要はありません。日本語でないと調べられないものは、日本語のキーワードを教えてください。

誰かの車に乗せてもらって連れて行ってもらうのではなく、自力で実行することを考えます。参考までに、以下の項目を選んで調べていってはどうでしょう。

いつ？

どこ？

そこで何ができるのか？／何をしたいのか？

どうやって行くのか？

費用はいくらかかるのか？

その他、参考になる情報

実際にこのテーマで日本語学習をしたとき、北海道の素敵な景色を見て、「北海道に行きたい！」といろいろ調べた学習者がいます。その学習者が出した結論は、「北海道に行くにはお金がたくさんかかります。北海道に行きたくなくなりました。」でした。

日本語学習で「どこに行きたいですか？」「北海道に行きたいです」といった会話練習がありますが、北海道に行くには費用がかかるという現実を知り、よりリアルな会話に繋がります。もちろん、「そんなに費用がかかるのか。じゃあ貯金しよう。」となってもいいですよ。

④ 自分の計画を発表する準備をする

次に、学習者が自分で調べた情報を、日本語でみんなの前で発表する準備を日本語ボランティアは手伝います。学習者が日本語の発表原稿または発表メモを作り、聞き取りやすい日本語で発表できるように練習する補助をしてください。

ある程度日本語ができる学習者の原稿は、表記の間違ひはないか、助詞が抜けていないかなどチェックしてあげてください。初級の学習者の場合は日本語として正しく、意味が通じればいいです。日本語ボランティアの作文にならないように注意しましょう。

発表の練習も大事です。間の取り方、イントネーションなど、相手に通じることが大事です。

⑤ 自分の計画を発表する

いよいよ発表です。練習どおりに発表していきます。

その時、発表している人の発表内容をしっかり聞くよう日本語ボランティアも学習者も心がけましょう。自分の発表のことが気になり、他の人の発表を聞いていない学習者がいます。これではもったいないです。①の自己紹介と同様に、発表内容を聞いて質問できるように促しましょう。本当に聞いていたか、発表の内容を理解したか、ファシリテーターは発表の内容に関わる質問を、発表を聞いていた学習者にして確かめましょう。

誰かが発表した後に、必ずその内容について質問されるということがわかると、学習者も日本語ボランティアも真剣に他の人の発言に耳を傾けるようになります。そして、聞き取れなかったら、すかさず「もう一度言ってください」とか「それはどういう意味ですか」といった質問をするようになります。聞き取りの練習にもコミュニケーションの練習にもなります。

このテーマで学習したとき、偶然県内の同じ観光地に行くことを調べた学習者が二人いました。一人は、公共交通機関を使ってそこに行く計画を立てたAさん。時間もお金もかかるので大変だという発表をしました。もう一人は、自動車を持っているのでナビでそこに行くという発表をしたBさん。Aさんは、Bさんの発表を聞いていませんでした。そこで、Bさんに発表を何度も繰り返してもらい、AさんにBさんの発表を注意深く聞くように促しました。はじめは何のこともわからなかったAさんも、何度も目に自動車で自分と同じところに行く計画を立てている人がいることに気づき、最後に「私もいっしょに連れて行ってください」という意味の発言を引き出すことができました。実際にいっしょに行ったかどうかは不明ですが、誰かの発言を聞き反応ができるようになることはコミュニケーション上大切なことです。

4. 振り返り

👉 日本語学習会での自分自身の活動を振り返りましょう。以下のチェックシートを使って自己評価をしてみてください。

<チェックシート>

チェックしましょう		◎	○	△	×
1	学習者が話し始めるのを待つことができましたか				
2	学習者の話を遮ることはありませんでしたか (ない→◎、たくさんあった→×)				
3	学習者の方が多く話しましたか (学習者が多い→◎、日本語ボランティアが多い→×)				
4	学習者が話す内容について興味を持って聞くことができましたか				
5	話の主導権を学習者に渡すことができましたか				
6	学習者が必要とする情報を適切に提供することができましたか				

こんなことがありました。上級の学習者がある観光地に行く計画を立てていました。この方は日本語がとても上手なので、すでにどこへでも自由に行ける日本語の力も経験も持っていました。ただ、観光地の名前に「天狗の庭」というところがあり、「天狗」という言葉がわからなかったため、日本語ボランティアに質問しました。日本語ボランティアは「天狗」という言葉は、今回のテーマ「自分で調べて計画を立てよう」には関係がないと判断し、「それは家に帰って自分で調べて」と答えてしまいました。ちょっと残念でしたね。学習者が知りたい「天狗」というキーワードでおしゃべりを展開しても良かったと思います。「自分で調べて計画を立てよう」というテーマからは逸れるかもしれませんが、「天狗」というキーワードからいろいろなおしゃべりができたかもしれません。学習者が知りたいことを中心におしゃべりを進めることが大事です。

5. おわりに

いかがでしたか。参加型の活動、対話を中心とした日本語学習の活動を紹介しました。

今回紹介した日本語学習は、2時間以上かけて実施してみてください。参加者の人数と話の盛り上がり具合によっては、自己紹介だけで2時間かかった場合もあります。あまり時間を気にすることなく、参加者どうしの対話を楽しんでください。もし、2時間かからずにすべての活動が終わってしまったとしたら、対話が十分になされていなかったのかもしれません。今回の「自分で調べて計画を立てよう」という活動は、学習者にそういった力をつけてもらいたいというねらいもありますが、学習者と日本語ボランティア、学習者どうしが対話をするための話題の提供という側面もあります。日本語ボランティアが自分の知識を全面的に提供するのではなく、学習者と同じくらいの発言の量になることを意識して、対話を楽しんでくださいね。

第3回

地域型日本語教育を考える

1. 増加／多様化する外国人住民
2. 「生活者としての外国人」とは
3. 地域型日本語教育を考える
4. 地域型日本語教育の実践
5. おわりに

なかがわ ゆうじ
中川 祐治

（福島大学）

1. 増加／多様化する外国人住民

近年、中長期的に日本で暮らす外国人（在留外国人）の方が増加しています。法務省のデータによると、令和元年6月末現在、約283万人（中長期在留者数約251万人、特別永住者数は32万人）の在留外国人で過去最多となっています。

国籍別にみると、最も多いのは中国で786,241人（構成比27.8%）、次いで、韓国が451,543人（構成比16.0%）、以下、ベトナム371,755人（構成比13.1%）、フィリピン277,409人（構成比9.8%）、ブラジル206,886人（構成比7.3%）と続きます。増加が顕著な国籍・地域としては、ベトナムが371,755人（前年比12.4%増）、インドネシアが61,051人（同8.4%増）となっています。

在留資格別では、「永住者」が783,513人と最も多く、次いで、「技能実習」が367,709人、「留学」が336,847人、「特別永住者」が317,849人、「技術・人文知識・国際業務」256,414人と続きます。

居住する都道府県別にみると、東京都が581,446人と最も多く、次いで、愛知県が272,855人、大阪府が247,184人、神奈川県が228,029人、埼玉県が189,043人と続きます。福島県は14,886人で東日本大震災以降、増加し続けています。

在留外国人の来日の背景を歴史的、社会的にみると、いわゆるオールドカマーといわれる在日コリアンの方や、中国帰国者、インドシナ難民、日系南米人、技能実習生、留学生、ビジネスパーソン、日本人の配偶者（いわゆる外国人花嫁等）、外国につながる子どもといったように、時代や社会、地域によって多様な方々がいます。地域社会の中で生活者として暮らす外国人の日本語教育、支援を考える上では、どのような社会、歴史的背景を持って来日をしているかを知っておくことはとても大切です。

2. 「生活者としての外国人」とは

たとえば文化庁では、「生活者としての外国人」のための日本語教育事業を進めています。日本語教育学会編（2008）によると、「生活者としての外国人」とは「『生活者としての外国人』を日本社会において、使用言語に関わらず、日本人との接触が頻繁にあり、さらに自ら接触場面への参加を意識する外国人、または、そう期待される外国人とする」と定義されています。また、次の4つのタイプに分類されています。

タイプ1：日本人との接触場面への参加がほとんどない外国人

タイプ2：限られた日本人との接触場面にしか参加しない外国人

タイプ3：一般日本人との接触場面への参加が求められる外国人

タイプ4：言語ホストとして日本人との接触場面に参加する外国人

👉 みなさんが関わっている／みなさんの周りに暮らしている外国人の方々を具体的にイメージしてみてください。上の4つのタイプのうち、どのタイプにあてはまりますか。

みなさんが関わっている、みなさんの周りに暮らしている外国人の方々は上の4つのタイプのうち、どのタイプだったでしょうか。タイプによっては必ずしも日本語が必要な人ばかりとは限りません。また、すべてが支援の対象になる人ばかりとも限りません。また、かつては地域の日本語教室に通い支援を受ける側にいた人が、その後、支援をする立場に変わり、地域の日本語教育の核となる人材（キーパーソン）となることもあります。大切なのは、決してのっぺらぼうでひとまとめにできる「学習者」ではなく、学習者一人ひとりがそれぞれの人生を過ごす「Aさん」「Bさん」「Cさん」であるという視点を持つということです。

したがって、それぞれのライフコース、ライフステージの変化によって必要となる日本語も変わっていきます。これを、石井（2008）では「Life（＝生活及び人生）を支える日本語教育」と言っていますが、単なる日常生活だけをいうのではなく、英語のLifeが持つ概念、「生活」「人生」「生命」といった幅広い概念として捉える必要があるでしょう。そして、そこには、日本語を通じて「生活」「人生」「生命」に関わっていく姿勢、「私たち」と「彼ら」と分かち合ではなく、同じ地域で暮らす住民として、対等に、相互に、「生活」「人生」「生命」に関わり合っていく日本語教育のあり方が求められるのです。

3. 地域型日本語教育を考える

日本語教育学会編（2008）によると、「地域日本語教育は、多言語多文化を背景とする住民を含めた地域社会形成のための、地域社会を基盤とした多面的重層的なシステムである」とらえる必要がある」とされ、以下のような図で示されています。ここから分かることは、地域型の日本

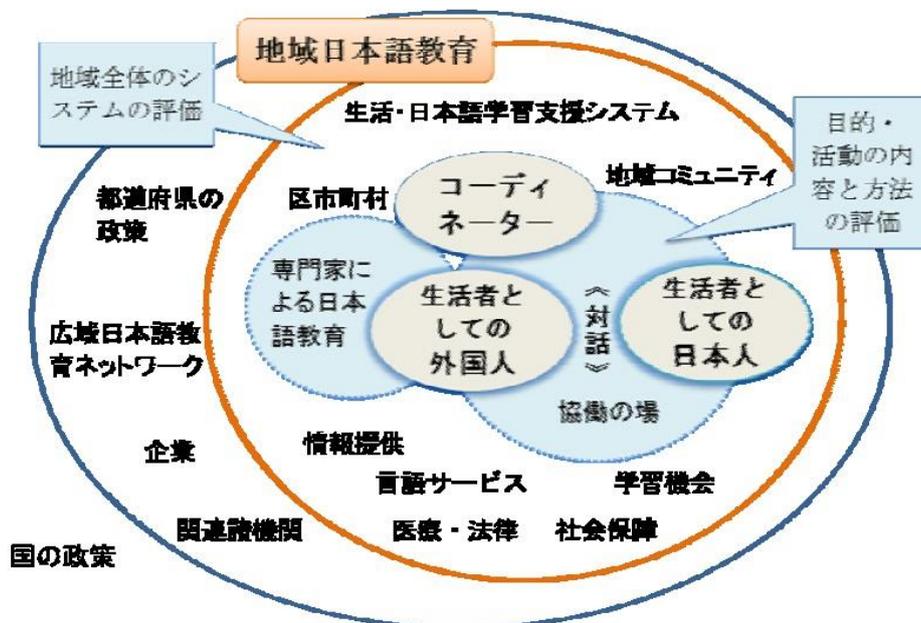


図1 地域日本語教育

語教育は、地域の日本語教室で完結するものではなく、それを取り巻くシステムの中に位置づけられているということです。また、生活者としての外国人と生活者としての日本人が対等な関係性の中で「対話」を通じて〈協働の場〉を形成しているということも分かります。また、コーデ

イネーターが〈協働の場〉と〈専門家による日本語教育〉の2つをつなぎ、生活・日本語学習支援システムを調整し、運営の中心となる役割を担っていることも分かります。いずれにしても、多様な関係者が参画し、教室と市町村、県、国といった大きなレベルにまたがった包括的なシステムとして地域型日本語教育を捉える必要があるでしょう。

また、池上（2007）では、以下のような地域日本語教育の「型」が示されています。

【地域日本語教育の「型」】

- ①場 「学校」ではない、非公式な場
- ②人 教える人は「教師」ではない人、教わる人は「生徒、学生」ではない人
- ③内容・方法 相互理解を促す活動を目指す
- ④目標 参加者の自己実現と共生、ひいては多文化共生社会の成立

では、地域日本語教育に関わる人に求められる資質・能力としてはどのようなものがあるでしょうか。

👉 地域日本語教育に関わる人に求められる資質・能力について考えてみましょう。

👉 また、自分にはどのような資質・能力があるか考えてみましょう。

cf. 難しい場合は、次の言葉をヒントに考えてみましょう。

「問題解決能力」「異文化理解能力」「言語の調整・管理能力」「自己実現能力」「日本語能力」
「異文化コミュニケーション能力」「異文化間能力」

ところで、地域型（社会型）の日本語教育と対比されるものに学校型（教室型）の日本語教育というものがあります。学校型（教室型）の日本語教育というと、文型積み上げ方式、パターン・プラクティス、ドリルといったものを連想してしまいがちで、地域型（社会型）の日本語教育とは対極にあるように思われる人もいるかもしれません。しかし、コース・デザイン的设计、レディネス調査・分析、ニーズ調査・分析といったものは、いずれにも関わるものであって、これらの基本的な知識を知っておくことは、地域型（社会型）の日本語教育を行う上でも大切です。

👉 それでは、実際の学習者（支援に携わっている人）を想定して次の項目について考えてみましょう。

- ①何のために日本語を学習するのか
- ②主にどんな人たちと話すのか
- ③主にどんな場所・状況で日本語を話すのか
- ④どのレベルまでの上達が必要か
- ⑤どのような技能（聞く・話す・読む・書く）が必要か
- ⑥日本語能力が向上すると社会で何ができるようになるのか

👉 さらに、実際の学習者（支援に携わっている人）を想定して次の項目について考えてみましょう。

- ①外的な条件
 - ・学習予定時間 ・週当たりの時間数 ・学習時間帯 ・自習の可否
 - ・使用可能な機器

- ②個人的な条件
 - ・日本語の学習経験 ・日本語のレベル ・使用教材
 - ・外国語の学習経験 ・外国語のレベル
 - ・好みの教授法 ・好みの練習法 ・好みのクラス形態 ・好みの教師

また、教える項目の一覧をシラバスと呼びます。シラバスは編成する時期の観点から分類した、

先行シラバス、後行シラバス、可変シラバスといった呼び方もありますが、内容の観点から編成から分類した、構造シラバス、場面シラバス、話題シラバス、技能シラバス、機能シラバス、課題タスクシラバス、複合シラバス、といった呼称がよく知られています。普段の教室活動をふり返ってみて、どのような内容を教えている（教えた）か、具体的に挙げてみましょう。

- 👉 具体的な活動をイメージして、どのような内容を教えている（教えた）か、ふり返って書いてみましょう。またグループやペアで話し合ってみましょう。

地域の日本語教室では、半年や1年間のカリキュラムが先に出来上がっていて、それにしたがって進めていくというケースはあまりないでしょう。学習者（支援に携わっている人）が来たり来なかったり、あるいは途中で辞めてしまったり、また何年も休んでいた人が急にやってきましたということも起こり得ます。また、支援者も毎回参加できるとは限りません。そのため、地域の日本語教室では、一回で完結できるような内容項目で教えているところもあります。また複数回に亘る活動でも、この回で何を学んだか、何ができるようになったかを学習者も支援者も意識し、記録に残していくことが継続的な学びへとつながっていくことでしょう。そのためにも学習シートのような学びの記録を残していき、ポートフォリオとしてまとめていけば、「評価」としても活用することができます。学習者にとっても支援者にとっても学習（学び）の軌跡を可視化することが大切です。

4. 地域型日本語教育の実践

ここでは、本プログラムで行った地域型日本語教育の実践の例を挙げます。必ずしもこのままの流れで進める必要はありません。目の前の学習者のニーズやレディネスをふまえて、計画してみましよう。

【実践例】「自分で調べて計画を立てよう」

目標	<ul style="list-style-type: none"> ・おすすめの観光地や店の情報を得る。 ・行きたいところに行くための方法を知り、自分で調べることができる。
活動の流れ	<ol style="list-style-type: none"> 1 自己紹介 2 学習者が行ったことがある場所や体験したことを話す。 3 観光パンフレットを参考に、学習者が行きたいところ、したいことなどの希望を話し、支援者におすすめの場所などを質問する。 4 自分が行きたいところ、したいことを一つ決め、それを実現させるための情報を支援者に尋ねたり、支援者と一緒にインターネットで調べたりす

	<p>る。</p> <p>5 インターネットで調べるための検索ワードを考える。</p> <p>6 学習者は自分の計画を発表するために、支援者と一緒に発表原稿を考える。</p> <p>7 自分の計画を他者に発表する。</p> <p>8 分からないところは質問をして、新たな情報を得る。</p> <p>9 ふり返りシートの記入</p>
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のスマートフォンを使って検索し、情報を得る方法を知ることができた。 ・観光パンフレットを見たり、日本人支援者に聞いたりすることで、日本の情報について知ることができた。 ・自分の行きたいところ、したいことがより具体的になり、より余暇を充実させることができるようになる。
新しく学んだ語彙や文	<ul style="list-style-type: none"> ・おすすめ ・イベント ・往復 ・片道 ・景色 ・共同浴場 ・温泉 ・東北の有名な祭りは仙台の七夕祭りです。 ・福島のおすすめの食べ物は天ぷらまんじゅうです。

5. おわりに

先に挙げた石井（2008）では、「地域日本語教育は、外国人の日本語学習を支援するという言語教育を主眼とした活動のみを指すものではなく、多言語多文化を背景とする住民を含めた地域社会形成のための、地域社会を基盤とした多面的重層的なシステムであるにとらえる必要がある」とし、そのシステムの中核は日本語教育であるものの、その目指すところは外国人の日本語運用能力の育成といった狭い意味での日本語教育ではないと述べています。そのために、「外国人と日本人が共に地域社会の中で生きがいを感じながら安全に暮らしていくために必要な能力の育成がその目標となる」のであって、「異なる言語文化背景を持つ者同士が地域社会で関わりながら生活する中で生じる具体的な問題を解決する力をつけること、すなわち協力関係を作り、対話を重ねながら交渉・調整を行うことで問題解決をはかり協力関係を維持していく力」（＝多文化共生コミュニケーション能力）が、地域日本語教育で育成すべき能力として掲げられています。また、これは、外国人・日本人の両方が対象となるものであるとしています。このように、「対話」する力を育てるものとして地域日本語教育を捉え直すのであれば、日本人支援者側の「多文化共生コミュニケーション能力」の向上も必要不可欠でしょう。

地域の日本語ボランティア教室の多くは、学習者が教室に参加した当初において、ニーズ、レディネス調査を行うことはあっても、学習が進んでいく過程や、ライフステージの移行に応じて、聞きとりや調査を継続的に行うことはあまりないかもしれません。しかしながら、同じ学習者であっても、ライフステージの移行に伴い、日本人との接触の度合いは変化し、またその必要性も変化するので、それらを迅速かつ確実にとらえるための継続的な対話の機会が必要です。一人ひとりのニーズをふまえることの重要性は従来から言われてきましたが、学習者のニーズをよりの確に把握するためには、まず、「対話」という相互行為を通して、また、その「対話の内

容」を分析することによって、達成できた、あるいは達成できなかった生活上の行為をより詳細に記述する必要があるでしょう。

これからの地域型日本語教育では、文型を中心とした教科書型の指導から歩を進め、対話する力を伸ばし、社会の中で活躍できる力を育成するといった観点を持つことがより重要になると考えられます。

《参考文献》

- 池上摩希子（2007）「「地域日本語教育」という課題—理念から内容と方法へ向けて—」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』20
- 石井恵理子（2008）「地域日本語教育システムづくりの課題と展望」『日本語教育年鑑 2008 年版』国立国語研究所
- 中川祐治（2018）「特定課題研究 地域日本語教育が育む異文化間能力—対話を通じて」『異文化間教育』47, 異文化間教育学会
- 日本語教育学会編（2008）『外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発—報告書—』
- ヤン・ジョンヨン（2012）「地域日本語教育とは何を「教育」するのか—国の政策と日本語教育と定住外国人の三者の理想から—」『地域政策研究』14-2・3, 37-48, 高崎経済大学地域政策学会
- 米勢治子（2006）「「地域日本語教室」の現状と相互学習の可能性—愛知県の活動を通して見えてきたこと—」『人間文化研究』6, 105-119, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科

第4回

世界に一つの国際理解講座

1. 地域の在留外国人の状況
2. 国際理解教材「レヌカの学び」の体験
3. オリジナル版「〇〇の学び」の作成
4. まとめ～多様性とは

まくた じゅんこ
幕田 順子

（公益財団法人福島県国際交流協会）

はじめに

地域に暮らす外国人の数は増え続けています。では具体的に福島県、そして自分が暮らしている市町村には、どのような外国人が暮らしているのでしょうか？

この講座では、まず地域に暮らす外国人の全体像を福島県などの統計的データをもとに見てきます。次にこの事業の最終成果である外国人学習者が日本語を使って自分にしか語れないエピソードを紹介するというプロジェクトワークに使える教材として「レヌカの学び」を体験します。最後に、皆さんで多様性ということについて考えてみたいと思います。

1. 地域の在留外国人の状況

法務省ではHP上は半年ごとに在留外国人統計を発表し、そこには全国の都道府県別の国籍別、在留資格別、年齢別、男女別などがエクセルデータで掲載されています。

自分の地元の外国人の状況を調べるワーク

法務省HPや福島県HPにアクセスして、次のことを調べてみましょう。

- ① あなたが居住する市町村には、どこの国籍の人が何人いますか？
- ② 全国と比較して、あなたの地域の特徴は何でしょうか？など。

【講師からのコメント】

福島県人口に占める在留外国人は、約0.7%で外国人散在地域と言えます。また、最近は全国の動きと同じくベトナム籍の技能実習生が増えています。

2. 異文化理解教材「レヌカの学び—自分の中の異文化に会う」の体験

これは、認定非営利活動法人開発教育協会（DEAR）発行の教材です。多文化共生や人権について考えるカードゲームで、4～5人のグループで活動します。

レヌカの学びの体験をするワーク

- ① 18枚のカードがあります。
- ② ネパール出身レヌカさんは、現在日本で研修しています。
- ③ それぞれのカードには、レヌカさんが、「ネパールで暮らしていた時の考え方や行動」、もしくは「日本で暮らしている時の考え方や行動」が書かれています。
- ④ グループで話し合いながら、カードを2つに分類してしていきます。
- ⑤ どのカードが迷ったか、意見が分かれたかなどを皆さんで共有します。
- ⑥ 正解を確認しながら、なぜそうなのかの理由を聞きます。
- ⑦ このワークを通じて、気づいたことを話し合います。

【講師からコメント】

このゲームをしながら、私たちは無意識に「レヌカさんが」という「個」の視点から、「ネパ

ールでは」と「国」の視点に変わってしまうことがあります。この瞬間、ネパールに対して自分が持っているステレオタイプでカードを判断してしまいがちです。

3. オリジナル版「〇〇の学び」の作成

国際理解講座では、外国人に母国のことを話してもらうことが多くあります。その際、インターネットなどで調べたことを話すだけであれば、その人でなくても別の同国出身者が話しても内容に変わりはありません。

ここでは、“この人だからこそできる”というオリジナリティの高い講座を実践するにあたって、一つの手法として、先ほど体験した「レヌカの学び」のようなカードを作成してみます。

オリジナル版「〇〇の学び」の作成ワーク

例えば、日本に暮らしているエジプト出身のAさんのカード。「交通ルールを守らない」と書かれたカードは、Aさんがエジプトのことを言っているカードなのか、それともAさんが日本のことを言っているカードなのかを参加者に考えてもらいます。正解は「日本」です。Aさんは、「日本は細かい交通ルールがあるのに守らない人が多い。エジプトでは、交通ルールは少ないからこそ、みんな気を付けて交通ルールを守る」というのです。

- ① このように、自分の海外経験や身近な外国人を想像して、参加者のステレオタイプを誘引するようなカードを作成します。
- ② カードを出し合って、参加者同士で体験します。
- ③ この手法を国際理解講座の中で使うことの意義について、皆さんで話し合ってみましょう。

【講師からコメント】

この手法を使うと、“その国”ではなく、“その人”について理解を深めることができます。つまり、参加者がその講師に注視するようになります。

4. まとめ～多様性とは

「私」という個性は、「性」「年齢」「人種」「出身地」「宗教」「職種」「外見」など様々な要素の集合体です。それにもかかわらず、時にはその中のひとつだけを取り出され、それがあなたの個性として他人から強調されることがあります。例えば、「レヌカさんは、ネパール人だ。ネパール人は、〇〇だ。だから、レヌカさんは、〇〇だ」となります。いわゆる「偏見」と呼ばれる見方です。

外国出身の人を理解しようとするとき、その国に対するステレオタイプというバイアスをかけてその人を見るのではなく、そのバイアスをできるだけ取り除いて、その人を見るようにすることが重要です。

《参考文献》

- ① 法務省 HP 「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」
（http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html）（2020.1.21 閲覧）
- ② 認定特別活動法人開発教育協会HP 『レヌカの学び～自分の中の異文化に出会う～』
（<http://www.dear.or.jp/books/book01/1373/>）（2020.1.21 閲覧）
- ③ 森田ゆり [2009] 『多様性トレーニングガイド』、解放出版社
- ④ 開発教育推進セミナー編[1997] 『新しい開発教育の進め方改訂新版』、古今書院

第5回

やさしい日本語

1. やさしい日本語とは
2. 基礎編
3. 応用編
4. 振り返りと共有

さいとう みゆき
齋藤 美幸

（インターカルト日本語学校）

はじめに

最近、自治体のお知らせや災害時のニュースで「やさしい日本語」を目にするようになりましたが、「やさしい日本語」と一口に言っても具体的にどのようなものなのでしょう。本研修では、対象が不特定多数のニュースやお知らせなどの書き換えではなく、目の前の人にわかりやすく伝える言い換えについて考えます。また、研修でのワークを通してお互いに刺激しあいながら、多様性に対応する力や柔軟性を養い、コミュニケーションスキルの向上を目指すことも目標とします。

以下、研修の概要と2019年に行った研修会での受講者の反応を記載します。みなさんも一緒に考えてみてください。

1. やさしい日本語とは

まず、みなさんの周りの外国人のことを思いながら、現在の日本における外国人事情をさまざまなデータから見てみましょう。

(1) データで見る外国人事情

インターネット等で調べてみましょう

観光客数の推移（観光庁 http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html）

在住外国人数（法務省 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html）

日本で働いている人（厚生労働省「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（平成29年10月末現在）
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000192073.html>）

日本語使用の割合、日本語理解の割合、

（法務省「平成28年度法務省委託調査研究事業『外国人住民調査報告書一改訂版一』

<http://www.moj.go.jp/content/001226182.pdf>）

（文化庁「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査」

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/zai_jugaikokujin.html）

外国につながる子どもの人数

（文部科学省「クラリネットへようこそー帰国・外国人児童生徒等の現状について」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/genjyou/1295897.htm）

「外国にルーツを持つ子ども、外国につながる子ども」が増えてきたことも報道されるようになりました。日本語の学習を必要としている児童生徒50,759人のうち日本国籍が10,274人だったそうです。筆者の勤めている日本語学校でも日本国籍の学習者はいますし、テレビ番組やスポーツ界で活躍している人々、さまざまな理由から日本に在住している海を渡ってきた人々がいます。国籍も使用言語もさまざま、いろいろな人が身近にたくさんいることを実感してください。実に多種多様な人々が日本に暮らしていることを知って、あの人は「X人だからX語を話す」とか、「黒人だから足が速くて英語を話す」と思ってしまわないように気をつけたいものです。

（参照：『アフリカ少年が日本で育った結果』星野ルネ（毎日新聞出版））

(2) 「外国人」体験

さて、みなさんは「外国人」になった経験がありますか。野球のイチロー選手は外国人になって初めて気づいたことがあるとあるインタビューで答えていたそうです。相手の立場に立たないと見えてこないことはたくさんあります。次のワークで自分の経験を振り返ってみましょう。受け手の視点に立つということは、やさしい日本語への第一歩として有効なはずです。

(ペアワーク) 海外経験

海外旅行、海外赴任、海外在住など「外国人」の立場になったことがありますか。そのとき、どんな経験をしましたか。どんな気持ちだったか、何か困難なことはあったか等も話してみましょう。

いかがでしたか。楽しかったことや、じろじろ見られたり、少し嫌な思いをしたりしたこともあったかもしれません。今回の研修の受講者には、海外のレストランでテラスではなく奥の席に案内された経験を語ってくれた人もいました。一昨年のことだそうです。

(3) 学習者（インターカルト日本語学校学生）からよく聞くこと

では、日本で暮らす留学生はどうでしょうか。筆者の勤めている日本語学校の学習者からよく聞くことをご紹介します。

日本人について…日本語で話したのに英語で返事される

質問に対してちゃんと答えない（答えにたどり着くまでに時間がかかる）

敬語を使いすぎ（「同じ人間なのにな」と感じる）

早口でわかりにくい など

次に、日本語についての回答を見てみましょう。普段何気なく使っている日本語は、学習している側から見るとどのように感じられるのでしょうか。ほんの一例ですが、これらの特徴は、外国語として日本語を使っている人に対する伝え方の工夫のヒントになるでしょう。

日本語について…文字が多く形が似ている

一つの漢字に読み方が多い

同音異義語が多い（特に漢字熟語） など

みなさんが外国語を習う場合と比べてどうでしょうか。ネイティブは早口で分かりにくいのはどの言語も同じですし、文字が複雑だというのも言語によっては同じです。初めてミャンマー一語を見たときに私もそう思いました。外国語の学習はどの言語もみな困難なことがあるということが言えそうです。

(4) やさしい日本語への歴史的背景と現在

漢字、外来語、法律や医療用語などの専門用語など、日本語母語話者に向けての日本語の見直しも適宜されてきました。それに対して、日本語を学習している人に向けて、文法や語彙を見直した最初の試みは国語国立研究所の野元菊雄氏による「簡約日本語」（1992年）だと言われている

ます。語彙の制限と「ます形」のみを使うことによってわかりづらい表現になってしまいました
が、これは日本語が第一言語ではない人への便宜を図ったという点で画期的だと言えます。

[https://shoin.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=792&file_id=22&file_n
o=1](https://shoin.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=792&file_id=22&file_n
o=1)

1995年の阪神淡路大震災の後、弘前大学人文学部社会言語学研究室の佐藤和之氏らの取り組みによって「やさしい日本語」という名称が知られるようになったとのことです。これは減災のための「やさしい日本語」で、災害時の情報提供を速やかにすることを目的としています。研究室のホームページに書き換えのルールやお知らせのフォームなどさまざまな資源が公開されていましたが、2020年1月17日をもって閉鎖されました。

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo.html>

減災のための「やさしい日本語」のポイントとしては、

- ・難しいことばを避け、簡単な語を使う
- ・文を短くし、文の構造を簡単にする 分ち書きにする
- ・大切な語は残し説明を加える、重要度が高い順に情報を絞り込む
- ・伝わりやすい順番、必要な情報を肯定文で伝える
- ・カタカナ・外来語、擬態語や擬音語はつかわない

などがあげられていました。

同じころ、一橋大学の庵功雄氏らの研究グループによって、増えつつある外国人を対象に非常時ではなく平時の情報提供のあり方の検討が始められていました。地域社会における共通言語としてという位置づけです。<http://www12.plala.or.jp/isaoiori/> やさしく言い換えるといっても、決して子ども扱いではないことに注意してください。

その後2014年からは、「減災のためのやさしい日本語」の書き換え原則を参考に、NHKが「NEWS WEB EASY」の配信を始めました。<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>
http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi/pdf/062_P3_2_田中.pdf

最近では、多くの自治体がホームページ上で「やさしい日本語」表記の情報を提供するようになり、私たちも日常的に目にするようになりました。

私はあるドイツからの学習者から言われたことが忘れられません。やさしい日本語で書かれた情報がインターネット上にいろいろあるので練習のために見たほうがいと伝えたところ、「やさしい日本語？じゃ、難しい日本語があるんですか。私が習っているのはどんな日本語ですか。私は日本人が話している普通の日本語が習いたいです」と言われたのです。括弧をつけて特別扱いするのではなく、お互いが気持ちよくわかりあえることばに易しいも難しいもないのだと思い知らされました。それはちょうど「ユニバーサルデザイン」のように誰にでも使いやすく寛容で楽なものと言えるかもしれません。お知らせやニュースなど不特定多数の対象に向けられた情報の場合はいろいろな制約が考えられますが、目の前の人に向けての言い換えの場合、「正しいやさしい日本語」とか「やさしい日本語のルール」というものを決めるのではなくオーダーメイドであるべきだと思います。以下、そのポイントを探っていきます。

2. 基礎編

この研修では、お知らせなどの書いたものをやさしい日本語にするのではなく、目の前の人にわかりやすく伝える工夫を考えます。普段から、自分の使ったことばが「わかりません」と言われた場合どう説明したらいいかを考える訓練をしておく、生活者としての外国人と話すときや、地域の日本語教室で日本語の支援をするときに慌てずすむと思います。次のワークでは、普段使っていることばで、どんなことばが難しいと感じられるかを想像し、難しいと言われた場合、どのように説明すれば通じるかを考えてみましょう。

(頭を柔らかくするワーク「山手線ゲーム」)

やりかた：提示されたテーマの言葉を一人一つずつ順番に言っていく。前に他の人が言った言葉と同じ言葉を言ってはいけない。しりとりゲームと違って、言葉の最後に「ん」がついてもかまわない。

今回の研修のテーマ：「日常よく使う言葉」…今朝起きてから会場へ来るまでに、見たもの、したこと何でもいいので、頭にぱっと浮かんだ言葉を書いてみましょう。名詞、形容詞、動詞、何でもかまいません。

どのようなことばが浮かびましたか。今回の研修では「ごはん、自転車、紅葉、高速道路、通勤する」などさまざまな語が出ました。「木」「葉っぱ」など実物や写真を見せるという方法が考えられます。「高速道路」の説明には、「お金がかかること、普通の道より早いこと、時速100キロで走ってもいいこと」などヒントになるような文をたくさん言うとわかりやすいだろうというアイデアが出ました。

(1) 基礎編の練習1 (単語)

単語をわかりやすく伝える方法にはいくつかのポイントがあります。次の単語をわかりやすく伝えてみましょう。

- | | |
|-------------|---------|
| 1. 遺失物… | |
| 2. 公共の交通機関… | 粗大ごみ… |
| 3. 土足厳禁… | 咳エチケット… |
| 4. ライフライン… | |
| 5. 炊き出し… | |
| 6. おやき… | 肉まん… |
| 7. こたつ… | 風鈴… |

いかがでしたか。以下に長年日本語教師をしている筆者の経験からポイントを紹介します。ただし、これらは日本語学校の学習者対象の例です。自然習得者の多い生活者の場合はまた違う可能性もありますから、あくまでも参考にとということで、それぞれ目の前の人にとってわかりやすい言い換えを行ってください。

1. やさしそうな別の語に言い換える 例：遺失物…落とし物、なくしもの、忘れ物
筆者の経験では「忘れ物」が一番通じました。
2. いくつか具体例をあげる 例：粗大ごみ…ベッド、机、椅子（を捨てたいです。）
「大きなごみ」では何のことかわかりません。テレビや冷蔵庫は違います。
3. イラストや写真、ジェスチャーも活用する
例：土足厳禁はイラストで。咳エチケットはジェスチャーで。
4. カタカナ語に注意する 外来語はもとの意味と違う場合があるので気をつけましょう。
例：ライフラインは1の具体的に言う方法で、電気、ガス、水道、電話
5. 受け取る側に立って考え、必要な情報を付け加える
例：炊き出し…具体的にパン、おにぎり、お茶、温かい食べ物
「無料（ただ）です」という情報を加えたほうが親切です。
6. 擬音語、擬態語は難しい ふわふわ、もちもちなどの言葉はわかりにくいです。
例：おやき…やわらかいです。中に漬物（野沢菜）が入っています。甘くないです。
受け取る側に立って考えると、中身も言うとお親切なことがわかります。
7. まったく知らない場合、自分ならどんな情報が欲しいかを考える いつ、だれが、何のために使うのかなど。
例：こたつ…冬に使います。テーブルのうえに布団などをかけます。中に電気のヒーターがあって、とてもあたたかいです。夏は出しません。（布団をかけません）

（2）基礎編の練習2（文）

文をわかりやすく伝える場合はどうすればいいでしょうか。次のような表現が分からないと言われた場合やどうも通じなかった場合の工夫を考えてみましょう。

1. 「ご本人が確認できるものを何かお持ちでしょうか」
2. 「地震が起きたら机の下に入ってください」
3. 「日本では、1960年ごろから町に道路やビルが次々につくられ、公園や空き地が少しずつ削られてきた。……子どもの体力と運動に関する調査では、走る、跳ぶ、投げるなどの基礎的な体力は昔より落ちている。（JLPTN3公式問題集より）」
4. 全部忘れちゃったんだって。

いかがでしたか。それぞれいろいろな工夫が考えられると思います。以下ポイントを示します。

1. 敬語はなるべく使わない 「です、ます体」でよい。
例：今、パスポート、在留カードがありますか。
2. 理由を言う（直訳はなく、どうしてそうするのかという理由があったほうが親切です）
例：地震のとき、危ないです。本やかばんで頭を守ってください。机の下も安全です。
3. 複文をできるだけ単文にする（初級で習う基本文型を使う）ことと、一つの文に一つの情報のみをすることを意識する ※「基本文型」というのは、「～でもいいですか。～するこ

とができます。～しましょう、なります」など。中学校で習う英語の表現「May I ～?、I can～、Let's 」などを思い出すとよい。

例：日本では、1960年ごろから、新しい道路やビルが増えました。ですから、公園や広いところがすくなくなりました。

4. 誰が誰に何を明確にする（自動翻訳機も誰が誰に何をはっきり入力したほうが正確な訳が期待できます）

例：～さんは、～を全部忘れたと言っていました。

また、「何々する物、何々する場所」のように名詞修飾になるとかえって難しいので気をつけましょう。

（3）基礎編の練習3（ある程度まとまった情報）

基礎編の最後は、まとまった情報を伝える練習です。伝言ゲームをやって、伝えるほうも聞くほうもお互いが本当にしっかりわかりあえる話し方をする工夫を考えてみましょう。

 （わかりやすく伝える練習「伝言ゲーム」）

3人でグループを作ります。外国人に「引越してきました。この近所のことを教えてください。」と言われたという設定で近所のことを話してください。

1. ペアで話す → 2. 聞いたことを別の人に伝える → 3. 本人に確認する

本研修では、図やイラストジェスチャーを加える工夫も見られました。一方、言えば言うほど難しい言葉が出てきてやり直すペアもありましたが、試行錯誤の繰り返しが柔軟に対応する力を養うことになると思われます。最後の本人に確認するときは、正しく伝わっていたことが確認できてほっとした和やかな空気に包まれていました。

3. 応用編

実際に日本語を第一言語としていない人々はどのような話し方をするのか、普段から意識すると特徴がつかめていいと思います。また、聞き手としてはどのような対応が求められるのでしょうか。先行研究も参考に聞く時の態度、方法も意識し、実際にワークでシミュレーションします。

（1）聞くときのポイント

筆者の経験から言えるのは、相手の話を最後まで待つことの大切さです。一つ一つの単語にとらわれず、文脈で聞くと最終的に相手が伝えたかったことの意味がわかることがあります。発音が不明瞭だったり、言い間違いがあったりして内容がつかみにくい場合も、横から言い直したり、先取りして想像で話したりしないようにして、ちょっと待ってみましょう。また、黙っている場合もことばを探しているのかもしれないから、様子を見てみましょう。

（2）話すときのポイント

国際交流パーティーで初対面の外国の人と雑談をしている様子が収録されている CD（『日本

語を話すトレーニング』野田尚史他 ひつじ書房「やさしい日本語で話す」)を視聴してみると、たたみかけるように質問をしないほうがいいことがわかります。一つ一つ丁寧に反応して、会話のキャッチボールを楽しみましょう。

(3) 外国人が望むコミュニケーションのポイント

これまでわかりやすさの工夫を考えてきましたが、日本語を第一言語としていない人は、実際にはどのような話し方が望ましいと思っているのでしょうか。望ましいコミュニケーションのポイントを調べるために、日本語学習者を対象にした調査が行われました。それによると、2の基礎編で見てきたように語や文をやさしいことばを使って言い換えたり、ゆっくり話したりするより、以下のような態度があげられたそうです。求められているのは、技術よりマインドということのようです。

- ・積極的な参加態度…熱心、協力的、積極的、丁寧、礼儀正しい、詳しい、わかりやすい
- ・相手に合わせた説明…相手の話をよく聞く、相手が理解しているか確認する、相手が理解しているか注意する、相手がわからないとき助ける

(引用:「やさしい日本語の使い手を養成する」柳田直美『<やさしい日本語>と多文化共生』)

これなら私たちがいつも心掛けていることですから、そんなに難しく考える必要もなかったとも言えます。しかし、熱心で丁寧なだけではやはり通じないわけですから、相手に合わせた語彙や文型を使いながら、相手が理解しているかを相槌や繰り返しなどで確認し、協力的にことばのキャッチボールすることが求められるでしょう。

(4) 総合練習

最後に、実際の会話に近い形で総合練習をしたいと思います。研修ではテキストを使用しましたが、テキストがなくてもかまいません。食生活など生活習慣や「健康法」などを話題に話してください。

 (日本語教室をイメージしてシミュレーション)

テキスト「『きらり☆日本語 N3 語彙』 1. 健康」内の語彙を説明する。

1. 「生活習慣チェックシート」内の語彙の説明方法を考える。
2. 実際にチェックシートをやって、得点を出す活動をシミュレーションする。
3. 学習者からストレス解消法や民間療法などを聞き出す工夫を考える。

受講者はみなさん丁寧に積極的で、そして協力的な態度で話すことができました。「あらためて説明しようとするとも難しく、説明しようとするほど難しくなってしまった。普段いかに適当に言葉を使っているかがわかった」という感想も聞かれましたが、受講者同士の意見交換が刺激になってよりよい方法を見つけることができました。

4. まとめ

最後に振り返りとして「1. 今日からやろうと思ったこと」「2. これからはやめようと思ったこと」「3. 今日学んだこと疑問に思ったこと」を簡単に書き出してください。お互いに気づ

きを共有したいと思います。本研修会受講者の感想は以下の通りです。

1. 今日からやろうと思ったこと

- ・ 短く言うことにした。
- ・ 普段、外国人と接することが多いので積極的にやさしい日本語を使っていきたい。
- ・ 日本語教室で配布する資料もこれからはやさしい日本語にしようと思った。
- ・ 今までやさしい日本語を簡単な入門編として馬鹿にして捉えていたがそうではないことに気づいた。
- ・ やさしい日本語を独断で選んでいたのがこれからは今日学んだような工夫をしてみたい。
- ・ 十分待っているつもりでも、相手の話を待てていない自分に気づいた。これからはもっと待とうと思う。
- ・ うまい言い回しを探して、つい大事なことが後回しになっていたことに気づいた。これからは大事なことを先に言おうと思った。

2. これからはやめようと思ったこと

- ・ 敬語の使い方に注意したい。
- ・ 今まで無意識に評価するような態度をとっていなかったか反省した。これからは相手の言ったことを評価しないように心がけたい。
- ・ 相手の目線に立つことがまだまだできていない自分に気づいた。
- ・ 先取りするのはやめようと思った。

3. 今日学んだこと、疑問に思ったこと

- ・ 生活習慣も配慮したほうがいいと思った。
- ・ やさしい日本語に甘えず、次のステップにシフトしていくにはどうしたらいいか疑問に思った。
- ・ 自分のやさしい日本語はやさしくないことに気づいた。
- ・ 難しい言葉が多くても熱意のある話し方には吸い込まれる感覚を実感した。言い換えの技術面ばかりではなくメンタル面も大事だと感じた。
- ・ やさしい日本語は外国人のためだけではなく、誰にでも有効なコミュニケーションの方法だと気づいた。
- ・ やさしい日本語を国語教育に取り入れるべきだと思った。

最後に

やさしい日本語への言い換えは、柔軟で臨機応変な対応はもちろん、豊かな発想や機転も必要です。思い込みを捨ててまずは聞くことから始めるとよいことを共通の理解としたいと思います。また、自分が外国人(少数派)であった経験、語学を学習した経験などを念頭に置いて、相手の立場に立って考えると気づくことが多いことも実感できました。

やさしい日本語への言い換えの工夫を考えることは、コミュニケーションの本質についても改めて考える好機にもなりました。異文化交流の場である地域の日本語教室はまさに出会いと対話の場です。目の前の相手を慮って話すスキルは、外国出身者と地域社会をつなぐ日本語ボランティア人材に欠かせないでしょう。

本研修では、日々かかわっている外国人をイメージして行うシミュレーションでしたが、まずは受講者同士が刺激し合って自分なりに言い換えの工夫を考えるのは、絶えず頭を柔軟にしておくという意味で有効です。しかし、今後は日本語を第一言語としていない人々を交えて実際にどのような伝え方がわかりやすいかを考える双方向の研修が効果的だと思います。「分かり合えるコミュニケーション」についてともに考えられる場を設けることは、地域の生活者として活躍の場にもなります。地域の日本語教室、防災訓練、文化紹介のイベントだけでなく、研修会も学び合いの場として活用し、私たちはみな、それぞれお互いに生活者として住みよい地域を作る担い手であることを意識していきたいと思います。

《参考文献》

- ・弘前大学人文学部社会言語学研究室 <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/2020.1.17> 閉鎖
- ・『「やさしい日本語」は何を目指すか』庵功雄 他編（ココ出版）
- ・『<やさしい日本語>と多文化共生』 庵功雄 他編（ココ出版）
- ・『やさしい日本語 ー多文化共生社会へ』 庵功雄 （岩波新書）
- ・『日本語を話すトレーニング』野田尚史他 （ひつじ書房）
- ・NHK NEWS WEB EASY <https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>

《使用テキスト》

- ・『きらり☆日本語 N3 語彙』齋藤美幸 他編（凡人社）

《参考図書》非日本語母語話者の著書

- ・『アフリカ少年が日本で育った結果』星野ルネ （毎日新聞出版）
- ・『ふるさとして呼んでもいいですか』ナディ （大月書店）
- ・『「国語」から旅立って』 温又柔 （新曜社）
- ・『節英のすすめ』 木村護郎クリストフ （萬書房）

第6回

外国出身者の持つ知識や経験を活かすプログラム 実践：すべては対話から始まる

はじめに

1. 日本語学習の最終目的
2. エンパワーメント実現に向けた流れ
3. 外国出身の人のエンパワーメントのために
～関わる人に求められる力
4. まとめ～私たちが繋がらないと学習者は繋がれない～
＜参考＞地球っ子グループの紹介

は が ようこ
芳賀 洋子

（地球っ子クラブ2000、多文化子育ての会 Cocorico、てんきりん）

はじめに

さいたま市で、多文化の子どもたちを応援する活動を続けています。

活動の場は3つあり、「地球っ子クラブ2000」は親子の日本語教室です。そこに子どもたちとお母さんたちが一緒に来て、体験を軸にしたいろんな活動をします。ことばの遊びをしたり、料理を作ったり、科学の実験をしたり、また、絵本を活動に取り入れ、その中で言葉のもとになる体験をたくさん作っていきこうという活動をしています。

「地球っ子クラブ2000」設立の後、子どもが生まれたときから社会に参加してほしかったという思うことがたびたびあって立ち上げたのが「多文化子育ての会 Cocorico」です。

そして、もう一つが、多文化共生の街作りを念頭に置いた「てんきりん」です。外国出身の人たちはすごく頑張っているのだけれども、地域の日本人との関わりがとても薄い。日本人側も、外国出身の人との付き合いに慣れていない。そんな現実の中で、日本人も外国出身の人もいて、皆でいろんなことを楽しみながら学びあい、いつの間にか垣根を低くすることができるみんなの居場所、友達作りの場所です。

このような活動を通して、「外国人のチカラを引き出す」ことが、地域の日本語ボランティアの最終的な役割であることを学びました。外国出身の隣人たちが、本来持っている力を日本社会の中で生かせるようになるために日本語ボランティアはどんな力をつけたらいいのか、その方法を考えて行きたいと思います。

1. 日本語学習の最終目的

第1回の研修会で、文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教育ハンドブックが紹介されていました。そのいちばん最後に「コラム⑦エンパワメント」があります。



↓

<コラム⑦> エンパワメント

人が自分の生まれ育った環境を離れ、外国へ移動する際、多かれ少なかれ、喪失体験が付いて回ります。家族や親戚、親しい友人、御近所さん、慣れ親しんだ生活環境や文化、仕事、自分を表現する方法や機会などと離れることになるからです。また、これまでできていたことが自分一人ではできなくなり、自分に対するイメージが変わったり、自信を失ったりすることもあります。

新たに社会に参入する「生活者としての外国人」にとって、日本語習得はそれ自体が最終目標ではありません。

獲得された意思疎通の手段により、人とつながること、言葉の壁によって発揮できていなかった自分らしさや力を取り戻したり、発揮できたりするようになること、そして社会の一員として自立し、社会生活のあらゆる領域に参画すること、つまり「エンパワメント」を実現することによって初めて目標に到達したと言いうことができます。そのことをしっかりと見据えて、地域における具体的なプログラムを構築することが大切です。

人はだれでも、社会の一員として自分らしさを発揮して生きることが幸せな人生につながります。日本で生活している外国出身の人も、当然のことながら例外ではありません。しかし、日本

に来た外国出身の人は、ことばの壁や文化・習慣の違いのために、自分らしさや、もともと持っていた力を日本社会の中で発揮できないこともしばしばです。日本で生活する外国出身の人にとって、人と繋がること、そして自分らしさを発揮して日本社会の一員として活躍できるようになること、つまり「エンパワーメント」が日本語学習の最終目標であるなら、日本語支援の最終目標も、外国出身の隣人の「エンパワーメント」を後押しすることであるはずでは？ここでは、「エンパワーメント」のための態度の獲得とスキルを考え、支援者としての資質の向上を目指したいと思います。

👉 グループワーク・その1

ボランティアを続けている原動力は何ですか？また、ボランティアをしていて、よかったですと思うのはどんな時ですか？

<人はだれでもありがとう！と言われたい！>

インドシナ難民として日本に来たGさんは、来日したのが40歳くらいということもあり、日本では、病院に行くのも子どもと一緒にしてもらおうような生活をしていました。けれども、ベトナムでは看護婦さんをしていただけあって、なんでもとても手早く正確にできる方でした。

ある時、地元の老人会から「外国のことを聞く」会に呼んでいただきました。Gさんは日本語が聞き取れても、自分から話すことはほとんどできませんでしたが、一緒に行った留学生のJさんに助けられながら楽しく交流の時間を過ごしました。最後になって「日本が好きですか？」という質問があり、Gさんは「好きですと答えた後、少し考えてから、Jさんを介してこう答えました。

「私は日本が大好きだけれど、日本の役に立てないのがすごく悲しいです」

この言葉は私にとって衝撃的でした。

日本語が上達しないというだけで、いつもいつもありがとうと言う立場になっているGさん。でも、Gさんの言葉からは、自分の本来の力を発揮して活躍したい、日本の中で役に立ちたい、という強い気持ちが伝わってきました。

日本語ボランティアがすべきことは「ありがとう！」と心から言うこと。みんなが「ありがとう！」と彼女に言えるような活動を作り出すことが私たちの仕事じゃないかと、気づいた瞬間でした。

ボランティアを続ける理由にやりがいや感謝されることを挙げる人もたくさんいると思います。でも、それはひっくり返せば、外国の人に自分がありとうと言われる機会を作ってもらっ

ているということでもあります。

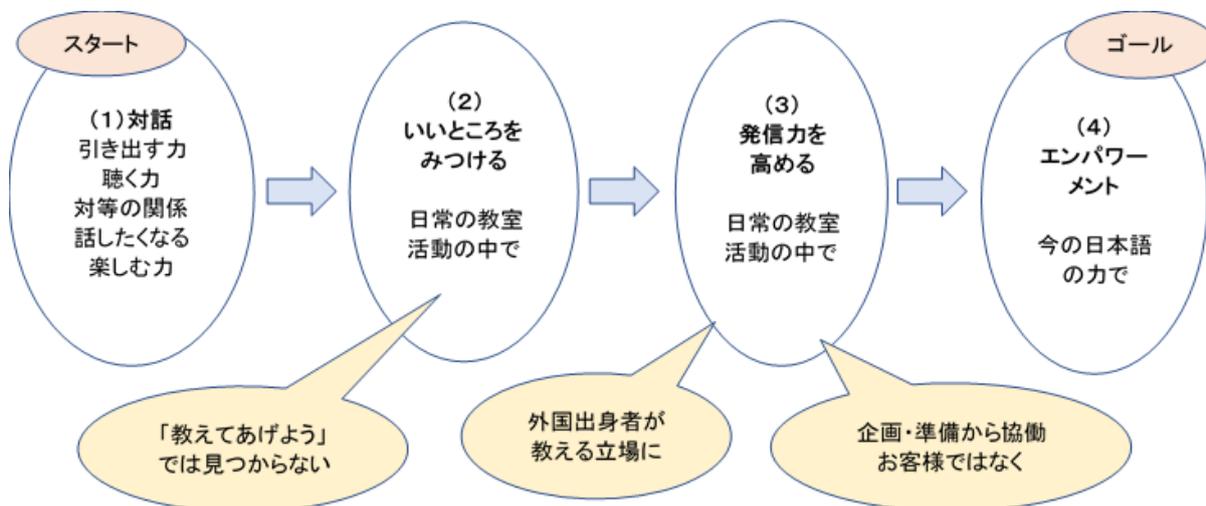
人はだれでもありがとうと言われたい

彼女に教えられたこの言葉は、以来、活動の基本姿勢となっています。

ここでは、外国出身の人のエンパワーメントが日本語支援の最終目標であると位置づけましたが、では、どうしたら日本語学習者に「ありがとう！」と言う機会を作ることができるのでしょうか？次に、日本語ボランティア側に必要な態度、スキルを具体的に考えて行きたいと思います。

2. エンパワーメント実現に向けた流れ

私たちが外国出身者と共に学び合う中で得た、エンパワーメントを実現するまでの流れを図に表してみました。



👉 グループワーク・その2

上の図を参考にしながら考えてください。自分らしさを発揮して活躍するとはどういうことでしょうか。

●どんなことができそうかあげてみてください。

●ゴールに向けて、関わる人はどんな態度で、どんなことをしたらいいでしょうか。

3. 外国出身の人のエンパワーメントのために～関わる人に求められる力

エンパワーメントを実現するためには、その人の良いところ、得意なところを見つけ、それ

を発信できるように高め、実際に発信する場を作らなければなりません。そして、良いところを見つけるためには、対話と協働作業が必要になるでしょう。ここでは、エンパワーメント実現のためのスタートである対話の力について、そのスキルアップを目指していきたいと思います。

(1) すべては対話から生まれる・対話の力とは？

ビジネス、教育の中で対話力が注目されています。それぞれの分野で少しずつ違ったニュアンスで使われているようですが、ここでは、日本語教育の中で「言葉を育て、より良い人間関係を生み出す、人と人が向き合った活動」と考えて行きたいと思います。対等の関係の中で、お互いに敬意の念を持ちあい、お互いの気持ちや立場を理解しようとしながら、豊かなコミュニケーションができる力を身に付けることを目的とします。

日本に来たばかりで日本語があまりできない人とでも、子供とでも、対話はできます。

日本語ができるようになったら～ではなく、今の日本語の力で活躍できるように

演出していくことが、日本語ボランティアの大事な役割だと思っています。活躍する場があることで、その結果、生活の中で「できる日本語」の力も上達することができます。

1) 対話に必要な態度と力

対話ができるために身に付けておくべき基本的態度を確認しておきます。

<引き出す名人…Educate の語源>

Educate は、「引き出す」という意味。ですから、Education＝教育は教えることではなくて引き出すこと。教えるのではなく、外国の人がもともと持っているものを引き出すことが大切。

<聴く名人・相手の気持ちがわかる名人…相手の力を受けて、ともにいい時間を作る>

自分の方がしゃべっていたら、相手の話を聴くことができません。日本語にハンディがあっても本当は言いたいのに言えない状況にある方の話をどうやって聴くか。自分が頑張るのではなくて、相手の方の持っている力を借りて、協働していい時間を作るという気持ちを大事にしてほしいと思います。

<やさしい日本語の達人>

相手によって、伝わる日本語は異なります。今の日本語の力、母語の違いによる影響などを考えて使う言葉を調整する力が必要です。

<ことばを楽しむ名人>

日本語にとらわれていると言葉を楽しめません。日本語も相手の言語も、大いに楽しんでください。

<いいところを見る名人←→日本語を見て人を見ず>

一生懸命話している外国出身の人に向かって「日本語上手ですね」と言う人を見ることが

あります。

「日本語上手ですね」という感覚で接していると、その人のいいところ、その人自身を見ることができません。日本語にとらわれず、その人が言いたいことに耳を傾けましょう。必ず、素敵ところが見つかります。

<相手を主役にする名人…ありがとう～と言いたい関係を演出するのは私たち>

主役は(外国の)皆さんです。この方たちを主役にする場面を作り出す名人になってほしいと思います。

日本語を教えよう!ではなく、「ありがとう」と言う場面をたくさん作っていきましょう。

その結果、外国の皆さんの日本語も上達します。

いっしょに日本の社会を楽しみ豊かなものにしていく隣人という意識が大切です。

<当たり前にとらわれない名人>

「別れるときには、何回お辞儀をしますか?」とタイの人に聞かれたことがあります。

フィリピンでは、ココナツの殻を使って足で掃除をします。

私たちの当たり前は世界の当たり前じゃない

外国出身者との対話が、自分たちの思い込みに気が付くきっかけを作ってくれることもあります。

2) やっていきましょう!ことばのゲームとワーク

参加者の言葉を使ったゲーム、ワークを紹介します。日本語教育に関わる人には、日本語を楽しむ力と相手の言葉を楽しむ力が必須です。一緒に楽しむことにより、たくさんの効果が生まれます。いろんな言葉を大いに楽しんで、対話のきっかけを作ってください。

とんとんリズムゲーム

<目的> 参加者の言語を使ったゲームを通して、対等な関係づくりができる。

① 4～10人のグループになり、時計回りに1. 2. 3. . . . と番号を決める。

② 手を2回たたき、自分の番号と違う人の番号を言う。

「とんとん(手をたたき)、1-6」次は6の人が言う

「とんとん(手をたたき)、6-2」

「とんとん2-4」「とんとん4-1」「とんとん

1-4」と続く

③ リズムに乗って言うこと。間違えたらその人からもう一度。

④ 外国出身者の言葉を教えてもらい、その言語でやってみる。

<発展>

数字だけでなく、好きなくだものや色、スポーツなどでもできる。



多文化キッズキャンプ in 福島にて

「とんとん、いちごーすいか」「とんとん、すいかーバナナ」など
 「とんとん、バスケーサッカー」「とんとん、サッカーー水泳」など
 名前をひらがなで書き、名前ですることもしる。
 (名前のときは、自分には「さん」をつけない。人には「さん」をつける。)
 「とんとん、やまもとーたなかさん」「とんとん、たなかーむらかみさん」など

名刺を作って自己紹介

<目的> 人のいいところを見つける力を付けるために、自分のいいところを見つける訓練をする。

肩書を3つ以上つけて書いてください。現実にはやっているのでないのでもいいです。できるだけ格好よく肩書をつけてください。周りの人と見せ合いながら話し合いながら書いてください。

<ヒント> 名刺の肩書き・どんなものがあるでしょう？

○○研究者 △○愛好家 □□アドバイザー ○□店長
 ○△□ドリーマー

(例) 私の名刺と自己紹介

草ぼうぼう亭・草かり主任
 多言語おはなし会コーディネーター
 竹細工職人・メザシスト
 大麦のストロー製作・販売

芳賀洋子

私は多言語おはなし会のコーディネーターです。私の家、草ぼうぼうなんです。草ぼうぼう亭の草刈主任です。それから、実は竹細工をやっているので、竹細工職人、ただしメザシストです。それから、大麦を今年植えたんですけど、大麦で作ったストロー販売、これもメザシストです。よろしくお願いします。

※注) メザシスト 「～を目指す人、挑戦する人」の意味。中国出身のGさんが作り出した造語。

おんなじ集め

質問に対して同じ答えの人の数だけ、点数がもらえます

<目的> 「おんなじってうれしい！」を演出したゲームです。

参加者の意外なところを発見して対話の発端を見つけてください。

用意するもの小さい紙3～5枚

- ①紙に、好きな動物を一つ書く。日本語でもいいし、絵でもいいし、自分の国の言葉でもいいです。
- ②順番に発表。同じものを書いた人は「おんなじ」と言って手をあげる。
- ③点数を計算する。自分が書いた動物を書いた人が誰もいなかったら1点。同じ動物の人がいたら自分も含めて同じ動物を書いた人の数が点数となります。
- ③お題を変えて繰り返す。3～5回のポイントを合計する。

「おんなじ」人がたくさんいるとポイントが高いので、みんなが何を考えるかを考えて書きます。あの人、たぶんこれを書くだらうから、私もそれを書いちゃおう、というふうに書くとポイントがたくさん集まります。

<お題の例> 「今」とか「今夜」など、小さな条件を付けるのがコツです。

「今、食べたい果物を書いてください」

「今日の夜、食べたい物」を書いてください。皆が書きそうなものを書いた方がポイントが高いですよ。

「私が皆さんに3万円あげます。好きな物を買ってください。ただし条件があります。今日の6時までに買ってください。貯蓄はだめです。一つだけ買ってください。」

●ゲームの効果

- ・教える人、教えられる人の関係を乗り越え、対等の関係を作る。
- ・自分の言葉を通し生き生きする学習者を見て、母語の大切さがわかる。
- ・日本語を学習する人の大変さがわかる
- ・参加者のいいところが見つかる。ステキなところが見える。
- ・いろんな言葉の面白さにふれることができる。

3) 対話のために～楽しむ力

ことばを楽しむ力「日本語はおもしろい！世界のいろんな言葉もおもしろい！」

ちがいを楽しむ力 「おんなじってうれしい！ちがうって楽しい！」

をもっともっと育てていきましょう。この力が、ことばや文化の異なる人との教室活動の中で、人間関係を築き、豊かな対話の時間を生み出す基礎になり、さらに、外国出身者が本来持っている力を出して活躍できる多文化共生の街を実現していく基礎になると思います。



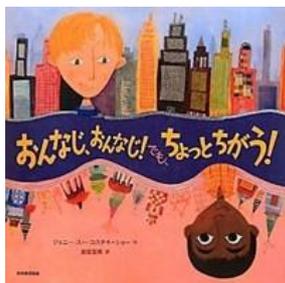
こんなところから対話につながっていきます

👉 グループワーク・その3

この写真を見てどんなことを感じますか？

- ・外国出身者3人（在住 1年未満、5年、20年）
- ・日本人5人（日本語教師3人、地域の人2人）

「おんなじってうれしい！ちがうって楽しい！」ということが感じられる絵本を紹介します。



作：ジェニー・スー・コステキ=ショー 訳：宮坂 宏美 出版社：光村教育図書

アメリカの男の子とインドの男の子が文通で、家族のことや学校のことを話します。おんなじことや、ちよとちがうことがたくさん出てきて、「おんなじだね」「ちよと違うね」「やっぱりおんなじ」とやり取りが続きます。

(2) いいところを見つけて活躍につなげる（日常の活動の中で）

外国出身者にとって日本語学習の最終目標であるエンパワーメントを実現するためには、ま

ず、いいところを見つけなければなりません。いいところを見つけるために、ストレングス視点という考え方、ないしは態度が参考になります。これは、1980年代後半、アメリカのソーシャルワークにおいて始まった援助観で、すべての人間関係の中で大切にしたい考え方です。

ストレングス視点

ストレングス視点とは、相手の欠点等に注目するのではなく、その潜在能力(意欲・才能・技能・好み・性格のよい部分・願望等)や環境(資産・人間関係・社会資源等)等、相手のストレングス(強さ、強み)に着目し、尊重し、それをいかした支援をしていくことにより、当事者自身が主体となり、援助者と対等で協働的な関係で問題解決していく視点のことを言います。

P45の名刺作りのところでの目的は、まずは自分のいいところを見る訓練でした。外国出身者の場合、日本社会の中でいいところが隠れてしまっていたり、日本語の力で過小評価されてしまったりすることが多いので、エンパワーメントするためにはこのストレングス視点がとても大事です。日本語を通して見てしまう習慣を改め、ともに暮らす隣人として学び合う姿勢と豊かな対話の力を身に着けた時、日本語を教えるだけでは見えない「いいところ」が見えてきます。ここでは、外国出身者のいいところを見つけ、見つけたいいところをどのように具体的なエンパワーメントに結び付けていくかを考えていきます。

1) 日常の活動の中でもできる「みんなの活躍」

はじめて会った日に、相手のいいところを見つけようという気持ちで接してほしいと思います。教える人と教えられる人という関係をなくし、相手が話し手、教える人、こちらが聴き手、教えてもらう人、という場面を作りだしましょう。立場の逆転を演出することはとても有効です。初めに確認した対話の姿勢があれば、きっと、相手が生き生きと語りだす姿を見ることができるでしょう。

いろんな人との対話の経験をいくつか例を挙げてみます。みなさんのセンスで、相手のいいところを見つけて、その人らしさを実現するお手伝いをしてください。

グループワーク・その4

対等な人間関係を作りだすために「立場の逆転」が有効です。日常の教室活動の中で、外国出身の人に先生になってもらうアイデアを出し合ってください。

実践例を紹介します。

◆ベトナムのお正月料理「バインテツ」を作ってきてくれたTさんと

右の写真は、Tさんが教えてくれたバインテッの作り方レシピです。

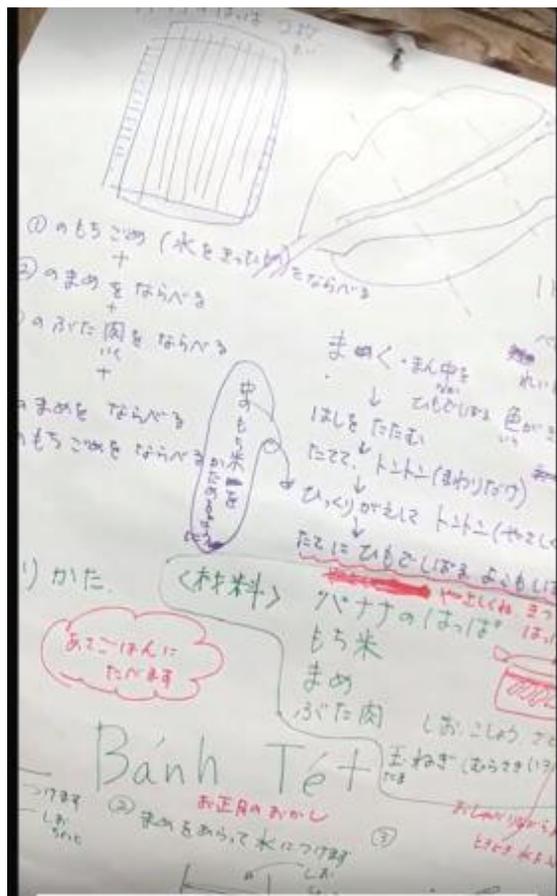
料理を教えてもらう時には、こんな方法もあります。

この日、彼女は料理の作り方を、考え考え一生懸命私たちに話してくれました。私たちも興味津々、一生懸命聞きました。

一通り教えてもらった後、さらにもう一度教えてもらって私たちが書き取ったものです。Tさんの書く作業にしてしまっただけだと思いませんでした。

彼女は、自分の日本語で、これだけみんなに言いたいことを伝えられたのは初めてだったのではないのでしょうか？

主役の学びたいこと、学び方のスタイルにこちらが合わせていくことで、自信がつかます。彼女の晴れ晴れとした様子にこちらも元気をもらいました。



◆グーグルマップを使って住んでいたところを案内してもらう。

本人しか知らないことをテーマにすれば、外国の人がたくさん話す時間になります。

◆その国の大きな地図があると、話を引き出すのにとても役に立ちます。

私たちには読めない言葉で書いてあることが肝心です。なかなか手に入りにくいものですが、国に帰った時に買って来てもらうようお願いしましょう。ネットからとる場合にも、自分たちで何とかしないで、お願いするようにしてください。

◆話の中で、日本語だけを使う必要はありません。

「〇〇語でなんですか？」と相手の言葉をたくさん取り入れたり、絵を描いてもらったりするといいですね。

絵が得意なことがわかって似顔絵を描いてもらったこともあります。

◆母語で活躍・就学時検診のサポート

就学時検診では、予防接種の記入など、外国の母子手帳を見て日本の書類に書くことは非常に大変で、日本人だけでは間に合わないことがたくさんあります。私たちは、外国出身の仲間と協働して病気の対訳表を作っています。インターネットで調べることはできますが、正しいかどうか確認できません。ポケトークもしかりです。そこで、外国出身の仲間と、いろいろ話しながら確認作業を進めます。日本語が堪能でなくても大丈夫です。時間はかかり

ますが、その人しかできないことで活躍してもらえます。

◆いろいろな言語のあいうえお表を作ってもらおう。

いろいろな言語の文字の一覧表（日本語の50音表のようなもの）を見ながら自分の名前を書くというワークショップを、おはなし会などと組み合わせてやります。その時に使う一覧表を作ることも、私たちにはできないことです。ワークショップでは、その国の人に教えてもらいます。一覧表は清音の部分だけ作って濁点の文字は入れないようにすると、外国の人に教えてもらわなければ完成しないので、コミュニケーションの機会が増えるという仕掛けを作ることができます。完璧に用意をしてしまうと、コミュニケーションの機会が減ってしまいもったいないです。

日常の教室活動の中でいいところを見つけ協働作業をする例を、いくつかあげてみました。みなさんの周りの人のいいところを見つけ、協働作業を企画してください。

2) 子どもの学習サポートでもできる「立場の逆転」

◆子どもに先生になってもらおう。

- ・ 漢字が身に着かない子どもに、日本人と同じやり方でドリルを繰り返させても、なかなかうまくいきません。こんな時は、発想を転換して立場の逆転を演出してみましょう。子どもに先生になってもらって問題を出してもらおうのです。子どもの先生は張り切って厳しくチェックしてくれます。普段、私たちは「止め」「はね」などは気にしていませんからチェックの対象になります。宿題も出し、次の時には問題を用意してきた子もいました。教えることは一番力がつくことです。自分から漢字学習をするように、心から感心してほめましょう。
- ・ 中国出身の子どもたちは、四字熟語、故事成語が得意です。中学2年の半ばで来日した生徒は、こちらが質問すると、学び始めた日本語で一生懸命説明し、毎回私に教えるのを楽しみにするようになって、めきめき日本語も上達、勉強もできるようになって、希望の高校入学も果たしました。
- ・ 日常の学習の中でも、子どもに先生になってもらうチャンスはたくさんあります。ギニア出身の子どもは、アフリカ全部の地理に詳しくて、曖昧な知識しかない私たちに生き生きと話してくれたこともありました。ちがう文化や言葉を持つ子ども達からの発信は、その子にとってはもちろん、周りの日本人にとっても、新鮮な楽しい時間となります。

（3）発信力を高める～グループ内での協働と活躍の場作り～

準備することはエンパワーメント実現の流れの中でとても重要な意義があります。企画、参加者集め、会場作り、買い物、当日の会費集め等、すべてエンパワーメントに向けた実践です。

準備してしまうことは親切ではなく、学びの実践の機会を奪うことになってしまいます。大いにお願ひして、ありがとうございます！と言ひましよう。

◆クルドの料理の会

「おいしい、ありがとう」という言葉があふれます。ママたちは日本語があまりできないけど、日本語じゃなくても大丈夫。日本語とクルドの言葉を教え合ひながら、楽しみながら、対等の関係が生まれます。子供たちも、学校では見せるチャンスがないパン作りの腕を發揮して、元気いっぱいでした。

◆てんぐりっしゅ （地域の英会話のグループ）

フィリピン出身 Nさん。中学3年で来日、半年後に高校受験をして、高校入学後から、地域の人たちに囲まれてイングリッシュメイトを務めています。勉強支援以外のこんなサポートもあります。

◆国際フェアへの参加の仕方

埼玉県国際交流協会主催で、毎年開かれるお祭りです。外国出身の私たちの仲間は、ここで、今の日本語の力を使って、自分の持っている良さを、日本社会に向かって発信する体験をします。

・サリーの着付け

バングラディッシュ出身のMさん。日本語は片言だけれど、たくさんの日本人にサリーの着付けをして、晴れやかでした。このような、言葉に頼らない場面では、これから日本語を学んでいく人に活躍してもらいましよう。日本語ができるようになったら～ではなく、今の日本語で！

・子どもたちの活躍「魚釣りゲームのお店」

封筒で作った魚が釣れたら、飴とかクッキーとか、自分で選んで好きな景品を選ぶようになっています。一時期、魚の中に飴やなんかを入れておいたことがあります。そうすると、釣って終わりになってしまい、もったいない。魚が釣れたら「ここにある物どれか好きなものを持って行ってください、どれがいい？」という仕掛け、コミュニケーションができるルールに戻しました。これも、準備をしすぎない良さがあるという例です。



「いらっしやい！いらっしやい！」

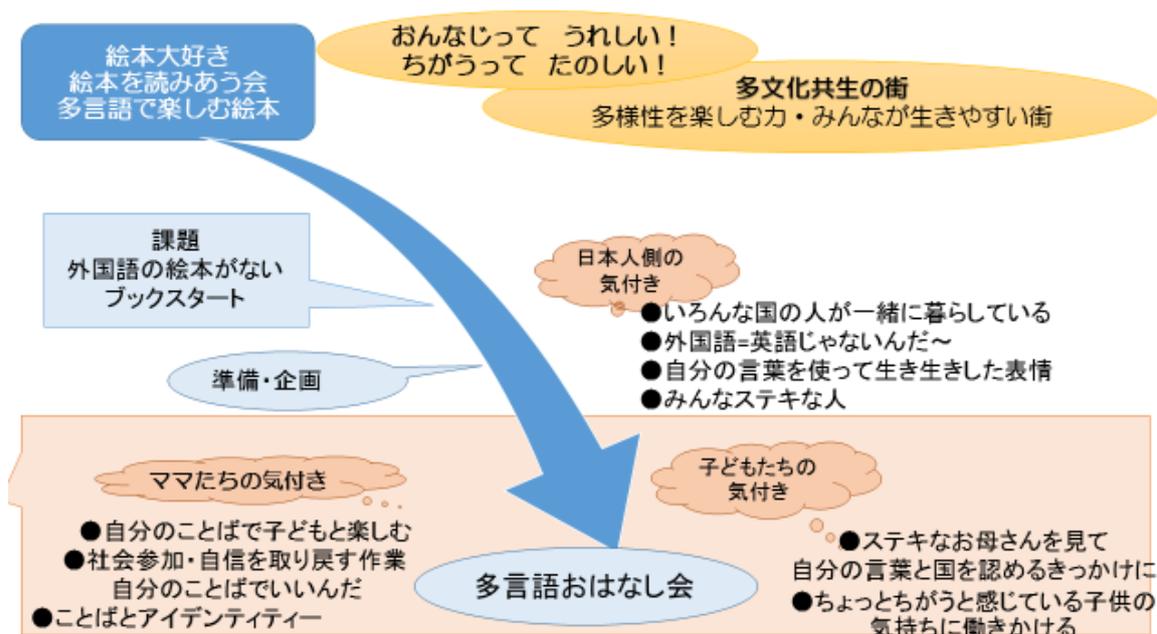
ごちゃ混ぜ感満載のブース

(4) エンパワメント～日常の中での協働・活躍から社会に向けた発信へ～

日常の活動の中で、自分が中心になって活躍したり、協働したりする例を見てきましたが、社会との関わりの中で、自分らしさを発揮できることは大きな喜びです。そんな力を本来持っているながら発揮できずにいる外国出身の人が私たちの周りには大勢いるはずですが、日本社会の中で、外国出身者が自分の持っている良さを発揮し、社会と結びついた活動ができることは、日本社会を豊かにするためにもなります。多文化共生の街作りの一端を担う仲間として活躍を始めた例を紹介します。

1) 多言語おはなし会

多言語おはなし会の流れを図で紹介します。日常的に開いている教室活動や「多言語で絵本を楽しむ会」からスタートして、図書館やチャレンジスクールなどで行う多言語おはなし会につなげます。



「多言語おはなし会」では、『挨拶絵本』『おおきなかぶ』など、日本で親しまれている絵本を使って、いろいろな国の人がそれぞれの母語でお話をします。発表までには、絵本の内容を話し合ったり、〇〇語で言ったら何と言うかということをつらつら積み重ねていきます。

話し手は、さいたま市、埼玉県在住の外国出身の人で、殆どがアジア、南米の方たちです。

当日、人の前で、自分の言葉を使って、本当に生き生きと演ずる姿を見て、「人にとってことばとは何か?」ということや「母語の大切さ」を実感します。そういう姿を見せてもらう私たちにとっても本当にうれしいものです。

聞きに来るのは日本人の親子です。

日本社会は、日本語しか通じない、しかも、外国語＝英語と思われがちな社会です。ここでいろいろな国の言葉に触れ、ワークショップなどを一緒に楽しみ交流することで、いろいろな国の人がそれぞれの言葉と文化を大切にしながら一緒に暮らしていることに気づいてもら

えます。英語じゃなくていいんだ～日本語でいいんだ～と感じてもらうことはとても大きな意味を持ちます。

外国にルーツの子どもの気付きもあります。自分のお母さんの言葉や自分のルーツを外に向かって隠したがっている子どもがそれを認めるようになるのはとても大変ですが、このおはなし会で、お母さんが自分の言葉で話をするのを観客が喜ぶのを見て、その場で子どもが変わるという場面を何回も見ました。みんなに喜んでもらえる、自分たちの言葉が認められることで、かすんでいた自己肯定感を取り戻すことができるという大きな意味もあります。

子どもが言葉を獲得していく過程でお母さんの言葉はとても大切なものですが、「お家でも日本語で話してくださいね」などと言われ、日本語で子育てしないといけないと思っている場合も多いです。この活動を通して、お母さん自身が自分の言葉でいいんだ～と思うきっかけになり、自信を取り戻すこともあります。

おはなし会に向けたお膳立てを日本人がするのではなく、準備と企画に外国出身者が関わることは、外国出身者、日本人双方にとって、当日以上に大きな意味を持ちます。こうした取り組みから、多文化共生の街作りを一緒に担っていこうという大きな意識につながっていくことも期待できます。

自分の言葉が認められるということは、とても大きな意義があります。おはなし会の活動で、自分の言葉を認められた仲間たちは、さらに自分らしさを発揮し、様々なところで活躍を始めています。

2) 埼玉県世界へのトビラ事業・さいたま市チャレンジスクール

埼玉県国際交流協会の国際理解教育事業です。登録した外国出身者と日本人アドバイザーがチームとなって、学校に行って授業をするのですが、そこへ私たちは大勢の仲間を送り込んでいます。お互いに情報交換したり、相談し合ったりして活躍しています。

3) より自分らしく

ルーツの国の文化を活かし、日本社会の中で、より自分らしく活躍を始めた仲間を紹介します。多様な人たちがみんながより暮らしやすい多文化共生の街を作るために、力強いなかまです。

◆「日本に来たから見つけた自分」 (韓国出身 Uさん)

地域の人に「教えて」と言われてキムチ作りを始めたのがきっかけで、キムチや韓国料理を通して「日本の人も韓国の人もその他の国の人もみんな友だちになろうよ」という会「チング(友だち)」を立ちあげました。

◆「日本に来たから見つけた自分」 (パラグアイ出身 Aさん)

ニヤンドゥティ(パラグアイの伝統刺繍)教室立ち上げ、展示会やワークショップを開い

ています。てんきりんの仲間が応援してくれました。

◆「お金がある訳じゃないんだけど」（スリランカ出身 S さん 小4で来日 大卒後会社員）

スリランカの子どもの里親になって奨学金を送っています。

大学生になって「世界へのトビラ事業」で、卒業した中学で話をしました。中学ではいろいろなことありましたが、その中学で授業をして喜んでもらえたことがターニングポイントになりました。講師登録をするために、応援してくれたみんながいたからです。

◆「今は在日チベットの子ども之母語教室にも力を入れています」（チベット出身 R さん）

ふるさは海拔 4000 メートルの村。自主製作映画「ぼくの村は天空にある」上映会をしました。

お客さん集めや当日の運営には皆の応援があって、大成功でした。

4. まとめ～私たちが繋がらないと学習者は繋がれない～

私の周りでは、外国出身の隣人たちが、いろんな形で活躍していますが、何となく実現したわけではなくて、やはり実現するにはそれなりにいろいろなことを考えてやっています。その時に一番頼りになるのが、同じボランティア同士であったり、自分の個人的な繋がりであったりします。

エンパワーメントの場作りの面から言うと、多言語おはなし会は、私が個人的に図書館のおはなしボランティアをしていた関係で相談を持ち掛け実現したのが始まりです。そして今、さいたま市の4つの図書館で開催しているほか、埼玉県の子ども大学とか、チャレンジスクールから声がかかることもあります。そのチャレンジスクールも、地域と一緒に活動していた、学校地域連携コーディネーターとの関わりで始まったものです。福島キッズキャンプに誘っていただいたのも蓬萊日本語教室のお声かけがあったからです。学校にいるスクールソーシャルワーカーとのつながり。さいたま市では、放課後の子どもたちの居場所作りをしているチャレンジスクールというのがありますが、その中心になっている学校地域連携コーディネーターとのつながり。それから、多文化ソーシャルワーク研究会に参加している社会福祉士のみなさんとのつながり。こうした繋がりが、外国出身の人たちのエンパワーメントに向けて、お役に立ったと思っています。

私たちが、繋がらないと外国の方は繋がれません。私たち自身がまず、いろんなところとつながりましょう。自分の趣味の関係なら、自然保護団体だったり、音楽関係だったり様々でしょう。子供さんの学校関係やPTA、地域の自治会などにも積極的に参加すればそれだけ人とのつながりは豊かになります。みなさんの持つ日本語以外の人的資源を、外国出身者のエンパワーメントを実現するために活かしてください。

<参考>地球っ子グループの紹介

ちきゅうこ地球っ子グループにようこそ!

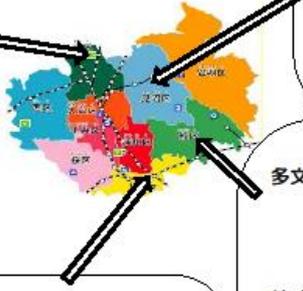
子どもと親のにほんご教室（うえたけ）

地球っ子クラブ（2002年～）
植竹公民館 第2・4土曜日 13:30～


勉強の時間 みんなでおべんとう作り 勉強の時間

うえたけこどもみんかん
植竹公民館（JR土呂駅・東武野田線大宮公園駅）
090-8804-4249（たかやなぎ）

いま、日本にいる子どもたちはみんな
これからの日本を支える子どもたち!



子どもと親のにほんご教室（ななさと）

地球っ子クラブ（2002年～）
七里教室 第2・4土曜日 10:00～


ななさとこどもみんかん
七里公民館（東武野田線 七里駅）
090-8804-4249（たかやなぎ）

科学あそび

多文化・多世代の学びの場 **てんきりん**（2005年～）

にほんご畑 / たぶんか多文化みんなの勉強部屋

毎週木曜日 10:30～12:30
絵本の勉強会 / 多文化カフェ / 絵を描こう!



たぶんかてんきりん（JR浦和駅からバス・だいたくぼ太田窪3丁目）
090-2415-8111（はが）

たぶんか多文化子育ての会 **Coconico**（2009年～）
第1・3・5月曜日 10:30～14:00


多言語おはなし会


親子で料理教室


世界の文字あそび

なつりコープラザ浦和（JR南浦和駅） 080-6123-0175（いとうえ）

実習①

外国出身者が自分だけのエピソードを見つける

1. はじめに
2. 実施にあたっての注意点
3. 講座の流れ
4. 振り返り

くさかべ きみこ
日下部 喜美子

（蓬萊日本語教室）

1. はじめに

私たちは、自分とは異なる価値観と出会い、葛藤し、新しい価値観を創り上げていく、この繰り返しが共生ではないでしょうか。外国出身の皆さんが持つ知識と経験、日本人や日本社会とは異なる価値観による物事の捉え方や考え方、これらは多文化共生の地域社会を創るために必要不可欠なものだと私は考えます。

それでは、外国出身の皆さんの貴重な価値観の提供をいつしてもらったらよいでしょう。多くの外国出身者は「郷に入っては郷に従え」だからと遠慮して自分の価値観を積極的に語ろうとしません。また、日本語が上手ではないという理由で発信する機会にも恵まれません。これはとてももったいないことだと思いませんか。

日本語が上手でなくても、外国出身の皆さんの知識や経験、ものの見方や考え方を私たち日本社会に発信してもらえるよう、日本語学習を通して外国出身の皆さんに力をつけてもらい発信の機会を提供することを目的としてこの「外国出身者が自分だけのエピソードを見つける」という日本語学習の活動を実施しました。

日本語が上手でなくても、外国出身の皆さんがイキイキと自分の考えや経験を語れるように発信の場の提供したいものですね。

2. 実施にあたっての注意点

(1) その人にしか語れないエピソード

外国出身の皆さんの知識や経験、価値観を日本社会に発信するということは、国際理解教育の範疇に属することかもしれません。今回目指す外国出身の皆さんからの発信は、単なる出身国の紹介ではなく、その人個人にしか語れないエピソードの発信です。インターネットが普及した現在、その国の情報はインターネットで検索すれば簡単に手に入ります。しかし、その人個人の経験や考えは、インターネットでは手に入りません。「〇〇という国は」という主語で語るのではなく、「〇〇という国の〇〇さんは」という主語で語る、生きた人間のエピソードを発信することで、さまざまな国出身の人をステレオタイプでとらえることなく、さまざまな個人と個人の関係が築いていけるのではないのでしょうか。また、外国出身者の皆さんが情報や価値観の提供者となることは、感謝され承認を受けることとなります。それが外国出身者の皆さんの自信となり自己実現につながります。さらに、外国出身の皆さんの社会参加をより促進することになり、私たちの社会は大きな財産を得ることになると思います。

その人にしか語れないエピソードを探すというのが、一つ目のキーワードになります。

(2) エピソードに普遍性を持たせる

その人にしか語れないエピソードといっても、ひじょうに個人的な体験談や感想では、聞く人の関心を惹くことはできません。個人的な体験談や感想を、聞く人にとっても有益な、考えさせられるものに変換することが必要となります。聞く人が思いもよらない物の見方やハッとさせられること、聞く人が自分もやってみたいと思えるようなことが発表できるといいですね。

例えば、ある東南アジア出身の人がこんなことを言いました。「日本人は、お尻の下に敷い

て使う座布団を二つに折って枕としても使います。びっくりしました。」パンツを帽子としても使う感覚でしょうか。そんなことを考えたことがなかった私は、なるほどと思ってしまいました。面白いですね。

また、日本語学習の一つとして日本人家庭を初めて訪問しお昼ご飯をごちそうになった体験を発表した技能実習生もいました。彼はこんなことをしてきましたという発表に加え、日本に来て日本で働いているが、会社と家の往復だけで日本人と個人的に接する機会がなく、日本人家庭を訪問する機会を得ることができてうれしかったこと、自分たちはそういう機会を欲していること、発表を聞いている皆さんの協力もお願いしたいことなどを訴えました。こういった提案や願いを入れることで、聞いている人も我が事として話を聞くことができるようになります。

個人的なエピソードを聞いている人も巻き込むエピソードにすること、これが日本語ボランティアの腕の見せ所です。

(3) プライバシーに配慮する

いくらその人にしか話せないエピソードだからといって、根掘り葉掘りその人のプライバシーに立ち入ることはよくないですね。話したくないことはそれ以上聞かないようにしましょう。

自分にしか話せないエピソードと言っても、なかなか思い浮かばない人もいます。その時は無理せず、いつかポロっとそんなエピソードが出てくるのを待ちましょう。発表もその人が望まない場合は無理に発表させるようなことがないように配慮しましょう。

3. 日本語学習活動の流れ

実際に実施した活動をまとめました。

2時間ずつ2回実施します。1回目と2回目の間に必要に応じて自習の時間も設けます。

時間は目安ですので、長くなっても短くしても構いません。

講座の流れ（全4時間）

時間 (目安)	学習者の活動	日本語ボランティアの動き
I. 自己紹介～エピソード探し		
30分	全体で自己紹介 ・名前と近況（対話のきっかけ作り）	自己紹介のモデルを示す ※対話のきっかけとなるようなエピソード（近況）を交えて自己紹介をする
90分	日本語ボランティアとペアになりエピソードを探す ※自由におしゃべりをする	学習者と対話をとおして普遍化できそうなエピソードを引き出す
	エピソードが見つかったら、発表に向けて原稿を書く	発表原稿作成の補助をする

Ⅱ. 自習（必要に応じて）		
	発表原稿を書く	
Ⅲ. 発表の準備		
45分	発表原稿を仕上げる	発表原稿を添削する
30分	パワーポイントを作る ※発表のタイトルと発表の内容に関連した写真をパワーポイントに貼る	パワーポイント作成の補助をする
45分	自分のエピソードを発表する 他の学習者の発表を聞き、質問やアドバイスする	スピーチでの発話の仕方（話すスピード、間の取り方、発音等）についてアドバイスする

4. 振り返り

日本語教室で実際に講座を実施したら、自身の活動を振り返ってみましょう。

チェックしましょう		◎	○	△	×
1	学習者の話す内容を、関心を持って聞くことができましたか				
2	学習者のプライバシーに配慮することができましたか				
3	学習者にたくさん話してもらえましたか				

学習者の知識や体験からエピソードを見つけ、普遍化して発表の準備をするという作業は難しい作業です。学習者もこのような学習方法に慣れておらずどうしていいかわからなくて戸惑う場合もあります。うまくいかない場合は、焦らず、無理せず、長いスパンでエピソードを見つけていこうという気持ちで取り組んでください。

日頃の教室活動で、「○○さんが今言った話、おもしろい！」と学習者に伝えることを意識することも大事です。学習者にとっては当たり前すぎて、それが発表のエピソードになると気づかないこともあります。日本語ボランティアがメモをしたり、学習者におもしろいと伝えたりすることでいつか素敵な発表ができるようになると思います。

実習②

日本人にインタビューする

1. はじめに
2. 実施にあたっての注意点
3. 講座の流れ
4. 振り返り

ながしま きょうこ
永島 恭子

（一般社団法人ふくしま多言語フォーラム）

1. はじめに

福島県の外国出身者の中にも在住年数が10年を超える方が増えています。生活する上で、日本語によるコミュニケーションに困ることはないものの、もっと日本語のスキルを磨きたい、という外国出身者のために、今回の講座を実施しました。

実際の講座に参加した外国出身者は、国際結婚や夫の仕事の都合で来日した女性で、在住年数も日本語能力も様々でしたが、それぞれが日ごろの生活の中で疑問に感じていたことに向き合い、解決に向けた活動に取り組みました。そして、活動のまとめとして、地域住民に向けた発表も実施しました。

今回のような活動は、日本語が初級レベルの学習者だけでなく、日常生活に支障のない程度の日本語力を有する学習者の日本語力向上も期待できます。

達成感を得ながら、最後の発表につなげられる流れになっています。地域のボランティア教室でも、この学習活動を取り入れてみてはいかがでしょうか。

2. 実施にあたっての注意点

この学習活動の大きな目標は下記の3つです。地域の日本語教室で実施する場合、ボランティアは、学習者がこの3つの目標を達成させるためのサポートをします。

- ① 学習者は、地域で暮らしていて日ごろ感じていた小さな疑問に気づく
- ② 学習者は、道行く人に、声をかけてアンケートに答えてもらう
- ③ 学習者は、アンケートの結果、分かったこと、残った疑問などを、文章でまとめて、発表する

①では、②の活動に向けて、学習者から日ごろ感じている、地域生活における疑問を引き出します。学習者の中には、なかなか思い浮かばないという方がいます。日本語教室で実施する場合、ボランティアは、おしゃべりを通して、学習者の「そういえば」という疑問を、引き出します。その際、ボランティアから疑問を誘導することのないように気をつけましょう。

②では、知らない人に声をかけて、インタビューによるアンケート調査を実施します。ボランティアが同行できる場合、ボランティアは、学習者が日本語で声をかける様子を「黒子」のように見守り、サポートしてください。例えば、声をかけた相手が学習者を不審に思ったと感じた時は、そっと後ろから「日本語の練習なので、ご協力お願いします」と言うなどして、協力をお願いしましょう。

③では、学習者がアンケートの結果から「分かったこと」「残った疑問」などを、おしゃべりを通して引き出します。学習者が、ボランティアの意見でまとめてしまうことのないように気をつけましょう。

おしゃべりの時間は、盛り上がってつい時間を忘れることもあるかもしれません。学習者が、自分の考えを日本語で伝えるということも、活動目標の達成につながります。次項の「講座の流れ」にある時間は、あくまでも目安ですから、おしゃべりの時間は十分にとって構いません。

最後に、今回、実際の活動では、スマートフォンのアプリや google フォームなどを活用しています。学習者、日本語教室のボランティアの皆さんの中には、こうした ICT 機器は苦手という、

という方がいるでしょう。そんな場合でも、ICT 機器が得意という学習者やボランティアがいれば、その人に教えてもらったり、代わりにやってもらったりと、助け合って進めてみてください。その助け合いも、日本語によるものであれば、日本語学習活動のひとつになります。ただし、ICT 機器の活動が困難という場合は決して無理をせず、ICT 機器なしの活動に切り替えても構いません。

3. 講座の流れ

実際に実施した講座の流れです。講座は、下記の流れで3回に分けて実施しました。時間は目安ですので、長くなっても短くしても構いません。

講座の流れ（全8時間）

時間 (目安)	学習者の活動	講師の動き
I. インタビューシートの作成		
120分	自己紹介	
	グループに分かれる。 ↓ 日本人住民に聞いてみたいことを思いつくままに口頭で話し合う。	日本人住民に聞いてみたいことを口頭で聞き出す。 ※ なかなか出ない時は、「仕事」「子どもの教育」「文化」「習慣」などカテゴリーを提示し、意見を出しやすいよう工夫する。
	グループごとに筆記者を決める。 ↓ 日本人住民に聞いてみたいことを、できるだけ多く書き出す。筆記者は、付せん1枚につき、聞いてみたいことを1つ書く。 ↓ グループごとに発表する。 ※ほかのグループの発表を聞いて質問を書き加えてもよい。	付せんを配布する。
	グループごとに書き出したものを、テーマ別に分ける。 ↓ どのテーマの質問を実際に聞いてみるか決定する。 ↓ 具体的な質問内容を決定する。	
	インタビューシートに質問のテーマ、質問内容などを記入する。質問したい人数分のインタビューシートに記入する。	インタビューシート記入前に、インタビューシートの作成方法について指導する。 ※選択肢を設けるか、自由回答とするか ※質問する相手については、何を聞くか 例：性別、年齢、出身、など

Ⅱ. インタビュー調査の実施		
60分	ペアになり、インタビューの練習をする。 練習の会話は録音する。	練習前に、インタビューに必要な日本語の表現をプリントを配布して指導する。 スマホを使った録音方法についても指導する。
	グループに分かれ、外に出て、知らない人にできるだけ多く声をかけ、質問する。 回答をインタビューシートに記入する。 インタビューの様子は、録音する。 ※ グループ内で協力し合う。 ※ インタビューシートを見せて回答してもらうのではなく、必ず口頭で質問し、質問した学習者が自分でインタビューシートに記入する。	各グループのインタビューシートの写真を撮り、学習者がインタビューに行っている間に、google フォームで回答記入フォームを作成する。送信先のQRコードを作成しておく。
Ⅲ. 発表の準備		
60分	講師が提示したQRコードから google フォームを開き、インタビューシートにまとめた回答を記入、送信する。	
	グループごとに google フォームで自動作成されたグラフを見ながら意見を出し合う。	回答結果から、分かったこと、感じたこと、もっと知りたいと思ったことなどについて、意見を引き出す。
90分	グループごとに発表原稿を作成する。	発表原稿の書き方を指導する。 空欄に回答結果を記入すると、発表原稿になるプリントを配布する。 書き終わった原稿を添削して、清書させる。
90分	グループごとにパワーポイント資料のデザインを紙に書く。 ↓ パワーポイント資料を作成する。	パワーポイント資料の作成方法を指導する。 ※ 学習者のスキルによっては、パワーポイント資料は、発表原稿を見ながら、講師が作成する。 ※ パワーポイント資料の作成が難しい場合は、紙に書いて発表用ポスターを作成する。
60分	グループごとに発表担当を決める。 ↓ 担当になった部分を各自音読し、録音する。 ↓ 音読データをパワーポイント資料に取り込む。 ↓ ナレーション入り発表動画を作成する。	発表動画の作成方法を指導する。 ※ 学習者のスキルによっては、講師が発表動画を作成する。
	各自ナレーション入り動画を持ち帰り、発表練習に役立てる。	

4. 振り返り

日本語教室で実際に講座を実施したら、活動の目標を、学習者がどの程度達成できたか、チェックをしてみましょう。講師（ボランティア）は、学習者が目標を達成できたかどうかを振り返ることで、自身のサポートの振り返りをしましょう。

チェックしましょう		◎	○	△	×
1	学習者は、日ごろ感じている疑問などに気づくことができた				
2	学習者は、知らない人に声をかけて、インタビューすることができた				
3	学習者は、発表原稿、発表資料を作成することができた				

2019年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業地域日本語教育実践プログラム（A）

主催：蓬萊日本語教室

外国人のチカラを引き出す日本語ボランティア研修 実習②

実習③

「発表会」の実施

1. はじめに
2. 「発表会」実施のために

くさかべ きみこ
日下部 喜美子

（蓬萊日本語教室）

1. はじめに

いよいよ「生活者としての外国人」のエンパワーメント事業「外国人のチカラを引き出す日本語ボランティア研修」の集大成「発表会」の実施です。

「発表会」は、学習者の学習の成果を形にして学習のモチベーションを上げる良い機会です。「発表会」のために原稿を覚えたり、発音を直したり、スピーチのための話し方を意識したり普段の学習ではしない学習のチャンスです。

また、日本語教室に携わる人以外の多くの人に学習者の発表を聞いてもらうことは、生活者としての外国出身者の可視化につながります。普段、あまり外国出身者と接点がない人にとっての外国出身者のイメージは、ニュースで聞く悪いイメージ、遠い存在としたぼんやりとしたイメージ、ひょっとすると金髪碧眼の欧米人のイメージかもしれません。しかし、「発表会」を実施することにより、自分の周りにこんなたくさんの外国人がいて、自分のイメージとは違い、こんな日本語を話し、こんなことを考えて、こんなふうに住んでいるという具体的な外国出身者を隣人として認識することができます。これが生活者としての外国出身者の可視化です。

外国出身者が身近に生活していることを知ることは、さまざまな価値観、さまざまな日本語を話す人を包摂した社会＝多文化共生の社会を創っていくことの始まりとなることを期待できます。

日本語教室関係者以外の人を巻き込んだ「発表会」をぜひ目指してください。

2. 「発表会」実施のために

(1) みんなで計画を

「発表会」の計画は学習者さんにも参加してもらって計画できると理想的です。

(2) 日本語教室関係者以外の人を巻き込む

小さな「発表会」でもかまいません。会場を借りている施設のスタッフや日本語ボランティアや学習者の家族、町内会の役員、民生委員など、1人でも2人でも異業種の方を招待して発表を聞いてもらいましょう。

もちろん、広く広報をして参加者を募るスタイルで実施するのもいいですね。

日本語教室が主催しても、国際交流協会に共催や後援してもらうのもいいですが、公民館等に共催をお願いしたり、公民館等の国際交流や国際理解の事業としてやってもらえないかこちらから積極的に交渉したり（売り込み）してもいいかもしれません。公民館等の主催事業として実施してもらえれば、ある程度の制約はありますが、日本語教室関係者や国際交流に関心のある人以外にも広く広報してもらえ、ふだん日本語教室と繋がりのない人に「発表会」を聞きに来てもらえるという利点があります。

「発表会」を実施して達成感を味わいましょう！